

東日本大震災

被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます

十全同窓会会報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

東日本大震災被災会員へのお見舞い

十全同窓会会長 佐藤 保

去る三月十一日に起きたマグニチュード9の巨大地震は東日本各地に未曾有の被害をもたらし、発生後一ヶ月を経た今も余震が頻発し、二万七千人を超える死者・行方不明者の特定すら確定できない現状であります。亡くなられた方、家族を失われた方々へは心からの哀悼の意を表するものであります。

今年の新年に、これからの日本は大きく変わるとの予感から「平成維新の幕開け」と述べましたが、まさかこのような大震災の形でことが始まろうとは考えもしませんでした。南北五〇〇キロ、東西二〇〇キロに及ぶ太平洋海域の地盤変化は、一〇メートルをはるかにこえる津波となつて一瞬のうちに東日本一帯の港や町を壊滅させました。加えて福島第一原発では一号機から六号機までの原子炉の機能が破壊され、陸・海・空に拡がる放射能汚染はレベル7とされる最大級の被害をもたらしています。その影響は緊急に移動を迫られた多くの住民の生活不安に止まらず、今後、わが国の農業、漁業、製造業にどれほどの被害をもたらすか、現段階では予測が付きません。将来、わが国のエネルギー政策にも影響を及ぼすことは確実で、まさに太平洋戦争の敗戦に匹敵する国難と申して過言ではありません。

しかしこの災害を契機として、国の内外を問わず大きな支援の輪が広がったことは見逃せません。いち早く被害地に集まった人、物、金のすばやい動きは、交通・通信・電話の途絶、道路の寸断を乗り越えて見るべきものがありました。世界各国から寄せられた暖かい支援も今後のわが国を支える大きな心の柱であります。

金沢大学附属病院からも医療班が順次組織され、六次に亘つて被災地に派遣されました。さらに県下の多くの病院からも、医療・介護班の派遣が相次ぎました。被害地における衛生対策もWHOから適切であったと評価されています。十全同窓会としても、まず被災地における会員の安否と動向を調査し、的を絞つて全国の会員に診療継続のための義援金を呼びかける運びになっております。

柳田邦男氏は「文芸春秋」誌上で、今回の災害のあらゆる局面で使われている「予想外」という常套句によつて、自己責任を回避してしまうこの国の伝統的思考法について述べ、今問われているのは日本人の想像力であると指摘しています。「想定外」の問題を解決するには、まず「まさか」というご都合主義から決別し、防災対策の想定規模を予算枠から線引きするのではなく、可能性のある最大規模を想定し、其の規模に耐えられる原発の防護法や市街地再建の基本的構想を立てることが重要だとしています。今回の大震災を契機に、我々は天災とあきらめることなく、人間の英知を結集してこの国を立て直すことが求められていると思います。

(平成二十三年四月)

安否情報をお知らせください

【宮城県】

山川 至 (S36) 鈴木 廣 (S54)
阿部義博 (S58) 伏見敏明 (H元)
佐藤信行 (H2) 池田雄一郎 (H11)
大柳 琢 (H21)

【岩手県】

藤原拓也 (S60) 戸田博之 (H17)
小早川源郎 (H会員) 時田一雄 (H会員)

【福島県】

星 輝和 (S51) 佐野全生 (S57)
大山誠也 (S60) 入江 哲 (H会員)
車田憲哉 (H会員) 穴戸計一 (H会員)
渡辺信哉 (H会員)

平成二十三年度
金沢大学医学部十全同窓会総会

日時：平成二十三年七月二日（土）

午前十時

場所：医学部記念館

一、開会の辞

一、議長選出

一、物故会員に対する黙祷

一、会務報告 理事長

一、医学系研究科報告 医学系研究科長

一、医学類報告 医学類長

一、支部長紹介

一、議案審議

（一）平成二十二年決定算

（二）平成二十三年度予算（案）

（三）役員改選

（四）その他

一、閉会の辞

《特別講演》

赤祖父 一知 先生

金沢社会保険病院 名誉院長

「彦三種痘所について」

《教授就任講演》

堀 修 教授

神経分子標的学（解剖学第三）

「小胞体に於けるストレス制御と

神経細胞死」

尾崎 紀之 教授

機能解剖学（解剖学第二）

「動物モデルを用いた

疼痛メカニズムの解明」

《懇親会》

特別講演及び教授就任講演は、脳医科学専攻・がん医科学専攻・循環医科学専攻・環境医科学専攻のUp-to-dateト

スを兼ねます。

石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

十全同窓会会長 佐藤 保

東日本大震災における派遣医療チームの活動報告

東日本大震災は正に未曾有の大災害となり、多くの尊い命を奪いました。お亡くなりになられた方々ならびにご家族様にお悔やみを申し上げるとともに、被災された皆様にご心よりお見舞いを申し上げます。同窓会員の皆様の中にも、今回の震災の当事者となられた方も多くおられると存じます。改めてお見舞い申し上げますとともに、被災現場での医療活動にご奮闘されている先生方に深く敬意を表します。

金沢大学附属病院からは、医療救護チーム、被ばく医療チーム等として、のべ四十名以上のスタッフが現地に派遣され活動いたしました（平成二十三年四月末時点）。この度、DMATとして被災地支援に参加する機会を得ましたので、震災直後の被災地の状況を中心に、金沢大学医療チームの活動をご報告させていただきます。

DMATとは、Disaster Medical Assistance Teamの略で、災害の急性期に活動できる機動性を持った災害派遣医療チームです。厚生労働省が実施する「日本DMAT隊員養成研修」を修了した者が、当院では二十名が登録されています。今回当院からは二隊のDMATが被災地で病院支援や患者航空搬送支援に参加いたしました（第一隊は三月十一日～十四日、第二隊は三月十五日～十九日）。

平成二十三年三月十一日、十四時四十六分。金沢でも座っていると軽い揺れを感じました。宮城県で震度七。津波

が押し寄せ多くの家屋が飲み込まれていく様子がテレビに映し出されていました。当院では、震災直後より出動準備に取り掛かり、五名のDMAT隊員（医師二名、看護師二名、調整員一名）が出発し、夜通し車を走らせ、三月十二日朝、仙台に到着しました。

支援に入った病院では、救急車が連絡なしに次々と到着していました。院内の電気は非常電源で確保されていました。その燃料補給のめどが立たない状況とのことでした。CT、MRIは使用できず、血液検査も十分にできない状態でした。食料も十分に確保されない中で、病院スタッフは家にも帰らず、懸命に医療活動を継続しておられました。

到着した朝には、低体温の患者が続々



と搬入されていきました。一人の患者は、真っ暗な中、首まで水につかり一晩救助を待ったそうです。低体温であるものの、意識はしっかりし、泣きながら感謝の言葉を繰り返しておられました。一方で、津波に襲われた多くの方々は病院に搬送されることなく、遺体として発見されていました。

挫滅症候群、頸髄損傷等の外傷患者も搬送されていきましたが、地震の規模の割に少ない印象でした。一方、重症とはいえない内科的疾患で受診される患者が多くおられました。脳梗塞疑いの片麻痺患者、肺塞栓疑いの患者も搬送されていました。その方々は、飲料水を確保できなかったことによる脱水が誘因となり発症したのではと考えられました。ライフラインが寸断された被災地では、夜の闇、寒さ、飢え、余震が被災された方々

の体力を奪っていました。

被災地は、電気、水道、ガスの供給が止まり、携帯電話も使用不能の状態でした。また、食料や燃料も枯渇していました。ガソリンスタンド

の給油待ちの車の長い列により、随所で渋滞となりました。営業している食料品店は見当たりませんでした。コンビニの前には一〇〇名ほどの人々が列をなし、いつ到着するかわからない商品の入荷を待っていました。第二隊が派遣された岩手県釜石市は津波被害が甚大で、よどんだ潮の臭いが立ちこめ、多くの建物が破壊され崩壊した町並みを見た時は、テレビ映像では伝わらない恐怖を感じたそうです。病院は入院患者やその家族、帰宅できない方々であふれていました。「震災で助かった命もこの状況下では失われる。」無力さを感じ、後ろ髪をひかれながら金沢に戻りました。

震災十日後からは、石川県の医療支援チームの一員として、医療班（医師一名、看護師二名、薬剤師一名）が交代で宮城県石巻市を中心に活動いたしました。海岸部では主要な病院や開業医の多くが被害を受け機能していない状態です。また、避難所だけで六十か所を数えます。他県からの医療チームと協力し、避難所等を中心に地域の巡回診療を行っています。避難所におられる方々は高齢者が多く、ほとんどの方が何らかの基礎疾患をお持ちでした。多くの方がこれまで内服



していた薬剤が手元になく、薬剤師と相談しながら可能な限り薬の処方を行いました。また、津波からの避難等の際のけがを、感染し



たまま放置されている方も多くおられました。胃腸炎、上気道炎等の感染症が集団発生している避難所も見られました。

被災された方々は、避難所のみにおられるわけではなく、同じぐらいの人数の方々が、流れなかった住宅で生活しておられました。その住宅の多くは、未だ電気や水道等のライフラインが復旧していません。体調不良を訴えられる方は避難所よりも多くおられる印象でした。

施設部判定士

平成二十三年三月十四日付、二十二文科施第六七三号により、文部科学省大臣官房文教施設企画部長より学長宛て、平成二十三年東北地方太平洋沖地震等における被災文教施設応急危険度判定士（以下、「判定士」という。）の派遣について、被災のあった東北・関東甲信越地方の地方公共団体等から判定士の派遣要請があった場合には、「被災文教施設応急危険度判定に係る技術的支援実施要項」（平成十八年十二月四日十八文科施第三九〇号）に基づき、

普段、病院では多くの検査を行い、治療を行っています。しかし、被災地での限られた医療資源では、とても十分な（適切な）医療を行うことができませんでした。「手当て」の語源は、患部に手を当てて治療することからという俗説があります。我々は「手当て」しかできなかったかも知れませんが、そんな我々に對しても、ありがとうと言って手を握ってくださいる患者さんもおられました。そんな方々がいる限り、今後も支援を継続していかなければならないと強く感じました。崩壊した地域の医療体制の再構築が早急に求められます。今後は地元自治体、石川県とも協力し、地域の診療所立ち上げ、運営支援も行っていくかねばと考えています。同窓会員の先生方とは現地でお会いすることもあるかと存じます。共に力を合わせ、復興の一助となれば幸いです。

（金沢大学附属病院 救急部副部長

太田 圭亮 記）

本学の判定士登録者の中から職員を派遣するよう依頼があった。

これを受け、施設管理部判定士登録者三名の中から人選し、派遣要請があった場合には、鷹西施設業務課長を派遣する用意があるとして、平成二十三年三月十八日に文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付宛て回答した。現在のところ（平成二十三年四月二十八日時点まで）派遣要請待機中である。

（鷹西 貢 記）

東日本大震災 放射線測定チーム

二〇一一年三月十一日午後十四時四十六分の大地震に伴う福島県原発事故により放射線測定の必要性を生じ、文部科学省からの依頼で私が医師として現地に赴いた。茶臼放射線技師、西尾事務員、坂田看護師とチームとして活動した。三月十五日に原発の水素爆発があり原発周辺が一時400mSv/hとなった直後の出発となった。富田病院長や絹谷教授、多くの病院関係者の壮行会のあと三月十六日水曜日午後八時十九分に金沢大学病院を出発し、新潟県内の米山SA内駐車場まで車中泊の翌朝六時に起床し、十二時には福島県被ばく対策本部のある福島県自治会館に着いた。我々は本部から指示された被ばく拠点施設のパレット福島で医療と被ばく者の放射線サーベイランスを行った。福島市内では324Sv/hであった。二、〇〇〇人以上の被災者が所狭しと体育館や廊下にシーツを敷いて寝てい



図1



図2

る状態であった。会場の屋根の電球が落ちて床にちらばっている状態で、屋根はひびが入っていた。一〇〇人以上の診察希望があり時間の許す限り、ペースメーカー術後患者、風邪、糖尿病、高脂血症、心臓病、アレルギー性鼻炎、精神的不安の強い人、高血圧、被ばくの不安がある人などの診察を行った（図二）。高血圧性緊急症の患者は〇拮抗薬と安定剤の投与とともにすぐに病院受診の必要がある者については近医に紹介した。頻拍を伴う高血圧が多く遮断薬が有用と感じた。本部での全体リーダー会議を終え断水中のホテルに入ったのは午後十一時であった。三月十八日朝本部から指示されたのは、福島県立会津学鳳高等学校、会津高等学校の放射線測定と医療ニーズへの対処で、学

東日本大震災 緊急支援資材 運搬チーム(山形大へ) 報告

平成二十三年三月十一日東北地方を中心にM9.0の大地震があり、あわせて太平洋沿岸の各地に巨大津波による甚大な被害をもたらしました。

この大震災のなか東日本各地の大学病院は、一時ライフラインが途絶える等のトラブルを受けながらも診療を継続し、かつ夜を徹してのインフラ確保により診療を継続させたご努力は、想像を超えたものと推察します。

この大震災から約一週間たった十八日に、名古屋大学を經由して伊藤病院部長のもとへ山形大学医学部附属病院(以下山形大学病院と言う。)への医療資材等の支援要請がありました。

しかし、本院においての医療資材は、院内物品物流管理(SPD: Supply (供給) Processing (加工) Distribution (分配))で行っているため、他の病院に対し提供可能な備蓄在庫はありません。今回の大震災に際し、文部科学省からの支援可能物資調査に対しても、備蓄している「非常用患者給食のみ提供可能」の回答を行ったところでした。

山形大学病院からの支援要請に対し、再度入手可能な医療資材等を探したところ、本院のSPDを請け負っている業者から、「販売する品物ではない試供品なら提供可能」との申し出をいただきました。ただし、試供品であるため製品の安全性と責任の所在を明らかにするため、各物品の製造ロット番号、有効期限の提示もあわせてお願いし、支援物資輸送の準備に取りかかりました。

時を合わせるように、本学のメインパ

ンクである北陸銀行より、支援物資としてペットボトルの水とタオルの申し出があり、これもあわせて輸送することとしました。

支援物資は、当初宅配便で輸送する予定でしたが、到着までに最短で十日を要するたため断念し、車両にての直接搬送とすることにしました。しかし、金沢大学の所有する車両はDMAT等で使用中であり、レンタカーの借上げも試みましたが、引越しシーズンとも重なり、搬送車両は確保できませんでした。結局、福島県に行っている放射線測定派遣チームの帰院を待つて、支援物資を山形大学病院まで直接搬送することとしました。

十九日に北陸銀行からの支援物資の提供を受けるとともに、搬送用支援物資の積込準備を行いました。搬送用車両が福島から帰院後、搬送物資の積込を行い、搬送は、伊藤病院部長、山崎経営管理課長及び西村調達管理係長で行うこととし、出発は二十日早朝六時としました。

山形大学病院では、久保田病院長をはじめ多数の職員に支援物資を直接お渡しすることができました。また、久保田病院長から被災時の様子と夜を徹してのインフラ確保及び人員確認を行われたこと等について伺いすることができました。

山形大学病院を出て、翌日帰る途中では、通行止めとなっている高速道路、ガソリンを求める長蛇の列を目のあたりにしましたが、弱音を吐かない山形大学病院職員と山形県民の頑張りにより頭の下がる思いをし、金沢大学病院へ帰院しました。最後に、本搬送にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

(経営管理課長 山崎 勝治 記)

東日本大震災の現場から

被ばく医療と医療支援は自己完結型でなくてはならない。想定される余震や二次災害、放射線への監視などを行いつつ、スタッフと自分の身を守るための情報を常に確保する必要がある。核医学の知識をもつ

地震発生五日後の三月十六日から六日間と二十日後の三月三十一日から六日間、土木学会調査団として現地調査を行った。被災後は一日も早い復旧工事が急務となるが、補修、撤去される前の、壊れたままの状況をつぶさに調査し、被災原因の究明、今後の対策の立案に役立てることが目的である。福島県新地町から岩手県宮古市までの海岸線を中心に、道路、橋梁、ライフラインなどの社会基盤施設の被害状況を調査した。

今回の津波被害で特筆すべき点は以下の三点である。まず、被害が広範囲に及んでいる点である。これまでの地震災害では、局所的な被害が繰り返し報道されることにより、全ての地域がそうなのかと誤解することが少なくなかったが、今回の災害では報道されていない被害地域が圧倒的に多い。報道しきれないほど広範囲に被害が生じているということである。つぎに、宮城県女川町や岩手県陸前高田市などで鉄筋コンクリート造二階建てから四階建ての建物が転倒していた点である。地盤に支えられていた杭基礎を引き抜いたり、切断したりしているものもあった(写真一)。殆どの鉄筋コンクリート造建物が転倒したわけではないので、転倒した建物に何らかの共通点が

た医師が原発事故での被ばく医療でできることは多く、臨床医は現地に赴き原発事故によって生じる様々な問題に対処できる可能性がある。

(金沢大学核医学診療科 松尾 信郎 記)



写真 1: 宮城県女川町における四階建コンクリート建物の転倒

津波はリアス式海岸の三陸地方を襲うもので、日本海側には津波は来ないという、根拠のない安全神話がある。一九八三年に秋田沖で発生した日本海中部地震の際には輪島港や舳倉島にまで津波が押し寄せ、舳倉島では漁師の方が津波に飲み込まれそうになっていた。さらに遡れば、一八三三年の山形県沖の地震では、輪島に6m近い津波が押し寄せたといわれている。石川県も決して津波と

東日本大震災災害医療チーム (JMAT) の派遣等について

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災されました方々に対し心よりお見舞い申し上げます。

石川県医師会では、多くの被災者や避難住民がられること、現地の医師、医療機関が被災されたことなどから、石川県及び日本医師会との連携のもと、被災地への支援として、災害医療チームの派遣や義援金の募集など、できる限りの支援活動を行っていくこととしております。

災害医療チーム (JMAT) の派遣については、民間病院や開業医などの多くの医療機関や医師、看護師等のご協力を頂き、三月十八日から福島県相馬市内の避難所を中心に、現時点では六月中旬まで



避難所におけるミーティング

無縁な場所ではない。海岸で地震を感じたらまず、高台や鉄筋コンクリート造建物の最上階や屋上に逃げることを考えなければならぬ。津波災害はまさに生か死の選択を迫られる災害である。死者・行方不明者数が三万人近くになるのに、負傷者数は三千人程度である。この数字が、津波の恐ろしさを物語っている。

(金沢大学理工研究域環境デザイン学系 宮島 昌克 記)

に延二十三チーム約一〇〇名の医師、看護師等を派遣することとしております。

ご協力を頂いた多くの医療機関や医師、看護師等の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、今こそ国民が丸となって共に手を携えて、この苦難を乗り越え、一日も早い復旧、復興がなされるようお祈りを申し上げます。

(石川県医師会会長 小森 貴 記)

派遣医療チームの概要

派遣開始日：二十三年三月十八日～六月中旬

派遣延チーム：二十三チーム(約一〇〇名)
派遣構成員：医師、薬剤師、看護師、事務員等

派遣延日数(移動日を含め)：一二五日(参考)

石川県の派遣計画(三月～六月)

・派遣先：宮城県石巻市ほか
・派遣延チーム数：八十三チーム(一チーム医師等四～五名)



避難所における診察

東日本大震災における石川県心のケアチームの活動

三月十一日の地震の直後、石川県・障害保健福祉課と同・神経科精神科医会が中心となり、直ちに被災地への心のケア支援のプランが作成された。これは県の関係者の御努力と御献身はもちろん、能登震災で他県から受けた御恩をこの機会に返そうとする石川県民の気持ちが後押ししたものであり、私も深い感銘を受けた。なお金沢大学としては、第九班の医師として精神科の戸田重誠講師(東北大学卒業)が現地に派遣され、三邊が石川県神経科精神科医会の心のケアチーム委員会に、大学代表として随時参加した。

派遣先：宮城県石巻市。

派遣期間：三月十六日から五月一日まで、車による往復移動期間と申し送りのための重複期間を含む各一週間ずつ、計九班を順次派遣。

支援活動：チーム構成は精神科医師一、精神保健福祉士一、看護師一、手話通訳士一、県の事務官と運転手各一であり、臨床心理士一が加わることもある。活動には石川県の健康管理チーム(保健師数名)も同行する。なお第一班、第二班は県立高松病院が主となつてチーム構成し、これに石川県こころの健康センター、精神科病院協会が主体のチームが続いた。

(三邊 義雄 記)

被災地会員の安否確認並びに義援金の募集

十全同窓会では四月中旬より岩手・宮城・福島・茨城各支部会員の皆様へ直接お手紙を送り、今回の大震災による被災状況の問い合わせを致しております。その結果、茨城県の会員の先生方(二十八名)には甚大な被害を受けられた方ではなく比較的軽微であったというご連絡をいただき、安堵いたしました。一方、残り三県では五十八名の会員のうち、五月十八日現在三十二名の先生方からご連絡をいただきました。そのうち、大船渡、南三陸町、気仙沼在住の三名の先生方が、自宅ないし診療所の半壊、全壊、流失という甚大な被害に遭われ、引越しを余儀なくされております。衷心よりお見舞い申し上げます。また、残り十八名の会員の先生方は未だにご消息が不明です。余震や原発事故もあり、大混乱がまだ終息していません。これら会員先生方の安否を大変案じております。全員のご無事を祈っております。本会でもメール等で引き続きご消息の確認作業を行っている所でございますが、本会報を読まれた会員の方で一頁に氏名を掲載しました会員各位の安否情報をお持ちの方は本会事務局まで至急ご一報下さいます様お願い申し上げます。来る五月三十日～六月一日にかけて現地三県へ赴き、お見舞いを申し上げる予定にしております。被災地では、自宅等を流失された先生もいらっしゃいます。本会では、会員の皆様方からの善意の義援金も受け付けておりますので、事務局までお申し付け下さい。また、他県でも震災に遭われた会員は、ご連絡下さい。(加藤 聖 記)

卒業生に贈る言葉

医学部長 井関尚一



皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんが卒業式を迎えたこの二〇一

一年三月は、東日本太平洋沿岸を襲った未曾有の大震災により後世に記憶されていくでしょう。このような困難な時期に卒業し、医師としての第一歩を踏み出すことに、皆さんは何か運命的なものを感じていると思います。およそ医療の中心を担う医師の役割というものは、いかなる時代や国家や社会状況においても重要さを失うことはありませんが、とりわけ今回のような大災害において医師の使命はより明確なものとなります。現在、被災地の病院では多くの医師が懸命になってその義務を果たしています。また全国から医療チームが応援に駆けつけています。皆さんはまだ即戦力になりませんが、一日も早く一人前の医師として社会に貢献したいと感じていることでしょう。その思いを今後の研修の励みにしてほしいと思います。

皆さんはこれから医師という専門家が集団に属することになります。専門家がprofessionalの原型は、近代西洋における医師、聖職者および法律家でありました。彼らが専門家であるのは、その扱う対象がそれぞれ人間の身体、精神および権利という、かけがえのない重要なものであり、また彼らが一般の人が容易にな

し得ない長く苦しい修行のすえに、一般の人が容易に持ち得ない知識と技量と人間性を得たと見なされるからです。医師という専門家は、人の健康、病、死に関する判断を独占するという特権を社会から与えられています。この特権に対する対価として、彼らはみずからの質を保証することを社会に対して宣言 profess します。これがprofessionalの語源とのことです。みずからの質の保証というのには、専門家が外部からの助けなしに自律的に構成員の質を維持するということです。このため個々の医師は常に最新の医学知識と技術を身につけて診療を行なわねばなりません。また後輩に対してみずからの医学知識と技術を伝えねばなりません。さらに、医学知識と技術の水準そのものを常に発展させていかねばなりません。すなわち診療、教育、研究の三者が、医師を専門家たらしめている源です。ギリシャの昔から、医師はひとりで診療、教育、研究のすべてを行なう存在でありました。皆さんには診療の面で腕をあげていただきたいのはもちろんですが、生涯の一時期でもよいので、教育と研究に参加することにより、医師という集団の専門性の保持に貢献していただきたいと思います。

成績を取ろうとしたはずですが。ところが入学して以来、多くの人は目前の試験に六十点以上を取ってクリアしていくことで満足してきたのではないのでしょうか。皆さんは医師となった以上、そのような六十点でよいという発想を捨て去っていただきたい。言うまでもなく、患者さんは六十点の医師ではなくて一〇〇点の医師に診てもらいたいのです。医師として.....

創立百五十周年記念事業の進捗状況

井関尚一

まず寄附金の状況です。三月初めの時点で約四、五〇〇万円となりました。この中には、平成十四年に会員のお一人からご寄附いただいた一、〇〇〇万円が含まれます。これまでのご寄附に対して心から御礼申し上げます。すでに着手した事業および来年予定する記念式典やシンポジウムを含めた見積もりは二、五〇〇〇三、〇〇〇万円ですので、これを超えた分は来年以降、正門から十全講堂間のプロムナード整備や医学部記念館改修などのキャンパス美化事業に充てることできます。しかしそれにはかなりの額が必要になります。

次に記念事業の状況です。医学部百五十周年記念誌(百五十年史)について三月十四日に第十三回の編集委員会を開きました。通史、教室史、余滴 写真のグループごとに順調に編集作業を進めています。通史の執筆はなかなか大変な作業です。余滴は同窓会員の皆様の投稿により構成されるもので、六月中旬で応募を締め切る予定です。

金沢医学館初代卒業生の群像をモチーフとした記念モノUMENTの制作は、昨年秋に金

の皆さんが直面する問題は、学生時代の試験問題のように正答が用意されているものではありません。自分の専門知識と技術のみならず、自分が得た教養、人間の性のすべてを動員してみずから解決せねばならない問題です。そのためには一〇〇%の力が要求されます。いかなる場合も常に全力投球し、そして生涯にわたって自分の力を向上させ続けてください。

沢美術工芸大学の石田教授に制作をお願いしており、同大学と金沢大学の交流協定における目玉事業のひとつとなりました。最終的な設置場所は未定ですが、来年の除幕式においては仮の設置場所として医学部基礎棟の中庭を考えています。キンストレーキのDVDについては、国宝修理所による修理過程を記録したビデオの各場面にテロップ(筋肉名など)を添付する作業を済ませ、さらに音声による解説を加える段階となり、業者を決定したところです。金沢医学館跡地である大手町の市医師会館の敷地に石碑を設置する件については、すでに市医師会会の了解をいただき、今後設置場所や時期、石碑の様式、碑文の内容などについて、寺畑会員ともご相談しながら詰めていく予定です。基本的には全学の創基百五十年記念事業により彦三郵便局前に設置される種痘所跡地の石碑と同様なものになると思います。なお、種痘所跡地の石碑は今年十一月のホームカミングデーにおいて除幕式が行われる予定ですが、跡地を決定された赤祖父会員の研究成果を今年七月の十全同窓会総会において講演いただく予定です。

三月二十四日に開いた準備委員会の第三回全体会議において、来年の記念式典について検討した結果、全学の創基百五十年記

就任挨拶

金沢医科大学理事長就任

竹越 襄 (昭和三十八年卒業)



この度、四月一日付をもつて九代目の金沢医科大学理事長に指名頂きました。

大変光栄であると共に責任の重さに身の引き締まる思いです。金沢大学医学部出身の理事長は五人目です。小生自身は村上元孝教授(故)と村上暎二教授(故)の両先生にご指導を仰ぎました。村上暎二先生は本学第六代の理事長を九年間されました。尊敬する先生の後塵を拝して本職を勤めさせて頂けることは感謝感激であります。

本学は来年で創学四〇周年になりますが開学当初は教職員の多数が金沢大学からの移籍でその点違和感は余りなくスムーズにスタートを切れた様に思います。建学の精神は「地域に貢献する良医を育成する」であります。その精神を肝に銘じた卒業生の医師は今日まで約三三〇〇人にのぼります。金沢大学他多くの大学に研修生や医局員としてお世話になっております。

さて開学四〇周年を迎えて現在や未来に解決しなければならぬ問題は山積しております。二つ三つ全職員が力を合わせて努力し、良い方向に進みたいと思っております。その一つに多くの卒業生が母校で初期および後期研修を受ける様に努力する事にあります。現在その数は国試合格者の五分の二で各医局は医師不足に頭を悩ませています。せめて三分の一ほど母校に残ってくれば各医局が

元気になり学生の教育、本人の研究・臨床に余裕が出てきます。この繰り返ししが良循環となり大学全体が活性化する事になります。そのためには如何に良質の教育を学生に提供するかに懸かっています。

更にもう一つは臨床医の臨床力を強化することです。病める人への思いやりの心を持った高度の技術を磨いた臨床医の存在こそが病院を繁栄に導く大きな力となるのです。その様な人材を求めています。その点我が大学は私学ですので優秀な臨床医を集められる体制作りを喫緊の課題として取り組みなければなりません。そのためには理事側と教側更に病院との三者の密なる連携が求められます。この体制作り専心したいと思っております。

第三番目には研究の充実です。最近ばかりでなく学外資金の獲得や産学共同(二件の会社設立)による研究費の充足により次第に研究の活性化が進み特許申請も国内外を含め十六件となりました。しかしまだ研究環境が満足なものではなく更なる充実が必要です。又医学部学生と研修医が research mind を持つような研究者・教授の情熱が必要です。兎に角基本は基礎・臨床に限らず教員と学生の学問を離れた人間としての付き合いが重要です。

以上とりとめも無い話をしましたが、今までは母校の金沢大学の分家のようなものでしたが、最近は本学卒業生からも優秀な人材が輩出し教授も多く(十名)将来が楽しみであると同時に母校を背負って発展させる意気込みを見せて欲しいと願っています。

いづれにしても本学金沢大学の変わりぬぐ支援・指導をお願い致します。

中本安成博士

(平成元年卒業)

福井大学第二内科教授に就任



平成二十三年一月一日付をもちまして、福井大学病態制御医学講座内科学(第二領域(第二

内科)教授を拝命いたしました。これまで、平成元年に金沢大学医学部を卒業後、すぐに第一内科(服部信教授)の大学院生として入局いたしました。そして、小林健一教授のもと学位取得後の平成五年から約三年間米田国スクリプス研究所に留学させて頂きました。その後、入局以来一貫してご指導を賜りました金子周一教授がご就任され、診療、研究、教育に加えて医局長などの管理業務の経験を積ませて頂きました。また本学がん研究所(村上清史教授、他)をはじめとする内外の共同研究に参加する機会を賜りました。この度は十全同窓会の諸先生方のお陰をもちまして、本学附属病院講師から福井大学教授として着任させて頂く機会に恵まれました。

福井大学医学部は開学三十年余りと若々しく、教室としては第三代の教授となります。消化器・神経内科のスタッフは加速度的に成長する途上にあつて多くの可能性を秘めております。教室としての地域における方向性は、彼らとじっくり考えていきたいと思っております。本同窓会の先生方にはこれまで通りご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

念式典(二〇二二年五月開催予定)とは別に医学部独自に創立百五十周年記念式典を行うこと、その日程は二〇二二年七月七日(土)とし、十全同窓会総会と同時に行うことが決定されました。また十全医学会シンポジウムも同時に行う予定です。なお、例年同窓会総会と同日に行われている関連病院長会議は翌週にずらすことが了承されました。式典の詳細はこれから詰めていきますが、今のところ午前中に記念館での十全同窓会総会(および十全医学会総会)に続いて十全講堂で記念式典および特別講演を行い、昼から記念モノメントの除幕式に続いて医学部構内(野外を含む)で昼食会を行って、夕方には終了という案が有力となっています。特別講演の数は、十全医学会シンポジウムを兼ねる場合は二題程度ということになります。講演者のうちひとりには医学の先端的研究者である必要がありますが、もうひとりには医学以外の研究者、または文化人にすることも可能です。同窓会員におかれましては、どなたか個人的なつながりで講演者にふさわしい方を存知でしたら、準備委員会にご紹介いただけると幸いです。

以上、ご報告いたします。三月十一日に発生した未曾有の大震災の傷跡はまだ深く、被災地への義援金等で何かと多端の折にまことに恐縮でございますが、まだご寄附をいただけない会員には募金の趣旨にご賛同くださり、よろしくご協力を賜りますようお願い申し上げます。前々回の会報に同封された振込用紙をご利用いただくか、医学部創立百五十周年記念事業のHP (http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin_med150/) から医学部総務係までお申し込みいただければ幸いです。

内潟安子博士

(昭和五十二年卒業)

東京女子医科大学内科学(第三)講座
主任教授ならびに糖尿病センター長に就任平成二十三年
四月一日付で東
京女子医科大学
内科学(第三)
講座主任教授な
らびに糖尿病セ

ンター長に就任いたしました。

私は一九七七年に金沢大学医学部を卒業し、一九八一年に金沢大学大学院医学研究科を修了後、富山医科薬科大学医学部生化学岡本宏(現東北大学名誉教授)教室の研究生、一九八三年より米国NIHのvisiting fellow, visiting associateとなり、一九八七年に現在の東京女子医科大学内科学(第三)講座・糖尿病センターの助手となりました。

金沢時代は小児科の臨床研修と学位研究に勤しみ、その後は糖尿病一本にテーマを絞り、富山での分子生物学的な手法、米国NIHでの免疫学的手法にてとくに1型糖尿病に関する研究に進進してきました。帰国後は、1型糖尿病および2型糖尿病、インスリン自己免疫症候群の研究に取り組む(十全医学会雑誌二七巻、一五三頁、二〇〇八)とともに、日常診療から生まれてくる着想を重視し、これを研究のみならず卒前卒後教育および大学院教育に活かすようにしてきました。

医師でありながら数々の政府の要職を歴任した拓殖大学第三代学長後藤新平先

生に「財を成すは下、仕事を残すは中、人を残すは上とす」という言葉があります。金沢大学医学部で教えていただいたことに感謝しつつ、研究・教育・診療にさらに邁進して行く所存です。同窓の先生方には一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



第三十九回医療功労賞受賞

梅崎 伸 先生

(昭和二十七年卒業)

退職ご挨拶

歯科口腔外科開設六十五年で初の定年退職のご挨拶

細胞浸潤学(歯科口腔外科) 山本悦秀

平成二十
三(二〇一
一)年三月
をもって退
職致しまし
た。教授就
任以来二十

二年八か月にわたり十全同窓会はじめ所属する医学系研究科、大学附属病院の關係各位等には大変お世話になり感謝しております。私の着任は昭和六十三(一九八八)年八月で、臨床系としては私が「昭和最後の教授就任」であつたことになりました。

さて当科は他の臨床科と異なり教授ではない診療科長の時代が長く続いたという特異な歴史がありますのでまずはそれを述べておかねばなりません。

一、当科の歴史…当科は昭和二十一年五月に院内設置されたのが始まりです。一名の歯科医師が診療を担当しましたが、予算・教官席とも借用というある意味では正規の戸籍がない船出でした。昭和三十三年にようやく文部省から認可され、正式に「歯科」として再発足しましたが、当初に配分された予算は、それまでの借金の返済に充てられたというエピソードがあります。昭和五十年に、現在の「歯科口腔外科」へと全国の国立大学病院歯科と共に呼称変更になりました。昭和五十二年に四代目の科長であつた玉井健三先生が初代の病院教授に昇任

し、昭和五十七年には診療科も講座に昇格し、やっと他科と比肩することになりました。創設から実に三十六年の歳月を要したことになりますが、こういった歴史の上で教授になられた玉井先生には大きな重圧があつたのか、五年後の昭和六十二年十月に五十二歳で急逝されました。そのあとに私が二代目教授に推挙されましたので、定年退職教授としては当科開設六十五年にして初めてということになり、役目を果たせたことに安堵すると共に歴代科長の努力に感謝しています。特に私にとりましては、平成十七年八月に進行の大腸癌(下行結腸)が発見されて以来、計三回の開腹手術を受けましたので、定年まで命がもつのかと大変不安に思つた日々もありました。お陰様で、肝転移切除術後の第一関門である三年無再発に達することができました。

二、着任後の研究体制…次に、臨床研究ではそれまでの菌性感染症一本に口腔癌、顎変形症および顎関節症を加えた四本柱にしたことで、それぞれが切磋琢磨するように育ち、結果として大学院生を中心に四十九名が医学博士を受領することができました。医学部歯科口腔外科の小規模講座としては出色の成果であつたと思います。さらに教授職後半になつて、これにインプラント義歯とドライマウスが研究に加わりました。そのうち、後者では平成十七年に私が中心になつて診療を始めました。当初は全くの手探りでし

たが、「患者から学び、患者に還元する」を実践した結果、今日までに一、一〇〇名を超える患者さんが受診され、私自身にとっても貴重な経験になりました。

三、医学科という一つ屋根の下で…当科はこれから三代目教授時代に入るものと思いますが、今後も各基礎および臨床分野と協調し、内科と歯科の橋渡しの役割を果たしながら、独創性の高い臨床研究を進めていくべく確信しております。本同窓会の皆様方には、より一層の御指導御鞭撻をお願いし、退職の御挨拶と致します。

会費納入のお願い

会費未納の方は、同封の振込用紙をご利用の上、お納め下さいますようお願い申し上げます。

ご住所やご勤務先など異動の際には左記事務局宛にご連絡下さい。

十全同窓会事務局

E-mail: juzen@med.kanazawa-u.

ac.jp

TEL 〇七六・二六五・二二三・一

FAX 〇七六・三三四・四二〇・八

住所

金沢市宝町二二二

山本悦秀教授退職記念講演会・記念式開催

平成二十三年三月五日に、歯科口腔外科山本悦秀教授の退職記念講演会と記念式が医学部十全講堂と記念館で開催されました。

最終講演会では、御自身のライフワークである口腔癌の浸潤様式に関する研究について述べられ、その研究結果は、提唱者である山本・小浜の頭文字からYK分類として臨床に広く応用されていることを述べられました。また北陸に新しい歯科・口腔外科技術を導入することに心血を注がれ、顎関節症の治療や顎矯正手術、あるいはドライマウスの治療の研究では北陸のみならず我が国の中心施設の一つに育て上げられたことを述べられました。この間、五名という少ないスタッフで二十二年間に四十九名の医学博士取得者を指導されたなどの御苦勞話は大変感銘深いものでした。大きな業績を残された山本教授に改めて敬意を表します。最後に御自身の闘病生活を医療者として述べられ聴衆に感銘を与えられました。記念式では松井実行委員長の式辞および記念品贈呈、中村信一学長、三宅邦明石川県健康福祉部次長（谷本知事代理）、佐藤同窓会長の祝辞の後、山本教授から御挨拶があり、同門や同僚の方々や病院関係者との和気あいあいの歓談の後、古川金沢大学理事の万歳三唱で散会しました。山本教授が金沢大学着任直後より開始され、その後、手術法や、分割した骨片の固定法の改良、術後の顎関節機能の解

析、骨片の長期安定性、さらには骨片固定用の各種吸収性プレートへの応用など、多岐にわたる研究を八十編余の論文として世界に報告・提案されてきました。さらに、北陸初のドライマウス専門外来を平成十六年九月に開設され、現在までに一、一〇〇名余の患者さんに対し良好な治療成績が得られています。この間、本症とカンジダ菌との関連性の検討により、昨年三月に御自身が本学より医学博士の学位を受与され、全国でも極めてまれな、歯学・医学の二つの学位取得者となられています。

教育面においては、医学系研究科細胞浸潤学分野（歯科口腔外科）の教授として、学生、院生の教育に尽力され、多くの優秀な人材を輩出されました。特に大学院では院生全員が歯学部出身でありながら、医学系研究科の研究体制に取り込まれているというやや特殊な状況にも関わらず、四十九名の医学博士の学位受与を指導されました。また山本教授在職中の著書・原著論文数は五八五編におよび、いずれも全国五十五の医学部歯科口腔外科教室としては群を抜き、特筆に値するものであります。一方、臨床面では、口腔外科疾患全般、特に口腔癌、顎変形症、重症型顎関節症、インプラント義歯およびドライマウスなどの診療を先進的に行うとともに、学生・研修医および若い医局員に対して実践的診断能力や治療技術・手術技術を教授し、多くのすぐれた臨床医を育成されました。

これらの診療・教育・研究に加え、山本教授は学会活動や社会活動にも多大な貢献をなされました。学会活動としては、平成十三年一月から四年間、日本口腔腫

瘍学会理事・雑誌編集査読委員長を、同じく平成十七年一月から四年間、同学会理事長として学会誌の編集、学会の運営発展と口腔腫瘍学の充実に貢献されました。またそれらと並行して平成十七年九月から四年間、日本口腔外科学会の理事として学会活動に尽力されました。さらに、全国規模の学会として平成十六年一月、第二十二回日本口腔腫瘍学会並びに学術講演会を開催されました。地元への貢献としては、平成十三年、石川県要介護者等歯科治療連携推進協議会議長として連携マニュアルの作成に尽力されました。また平成十六年四月から現在まで金沢地方裁判所医学専門委員として、数々の事例に対して専門的意見を陳述し、判決に対する公正な判断材料を提供されました。一方、御自身の長年の趣味である市民マラソンと御自身の闘病体験をもとにした著書「後進走サンデー」シリーズを地元新聞社から五編出版され、医療者自ら健康に走ることを率先実行されるときともに、多くの人に勇気を与えられました。

以上、山本教授の御業績の概略を御紹介しましたが、改めて医学系研究科・医学類・大学附属病院への多大な御貢献に感謝いたします。

（医学系長 松井 修 記）



追悼文

福代良一名誉教授追悼

金沢大学大学院医学系研究科 血管新生・結合組織代謝学(皮膚科学) 竹原 和彦



金沢大学医学部皮膚科学講座第七代教授 福代良一名誉教授が、平成二十二年十二月二十九日に肺炎のため逝去された。享年九十七歳であった。先生は大正三年十月十一日 島根県簸川郡でお生まれになった。松江高校を卒業、昭和十四年三月東京帝国大学(現東京大学)医学部医学科を卒業され、同年四月東京帝国大学医学部皮膚科泌尿器科教室に副手として入局された。昭和二十年七月東京大学講師、東京大学医学部附属病院外来診療所医長、昭和二十六年十一月医学博士を授与され、昭和三十年十二月東京大学助教授、昭和三十四年四月一日から同年七月一日まで東京大学医学部皮膚科学講座担当、その後昭和三十四年八月から昭和三十五年三月までアメリカ及び西ドイツ留学を経て、昭和三十五年四月一日、川村太郎教授の後任として金沢大学教授に就任された。

二十年間の在任中、サルコイドーシスの臨床的研究、病原性真菌の電子顕微鏡的生化学的研究、真菌症の臨床的研究、皮膚悪性腫瘍や皮膚色素細胞の電子顕微鏡的研究、悪性黒色腫の細胞学的研究など、研究は多方面にわたって進められた。先生が発表したサルコイドーシスの皮膚病変の臨床分類は、臨床症状に組織学的特徴を加味した優れた分類法であり、「福代の分類」として現在も用いられている。また、日本で初めて「非定型抗酸菌症」の症例を報告されたが、この患者は石川動物園(当時卯辰山に存在)の熱帯魚飼育係であったことは、知る人ぞ知る逸話である。これらの業績により、昭和六十二年十一月勲三等旭日中綬賞を受けた。

また、昭和五十一年四月から二年間、金沢大学医学部附属病院長として、附属病院の管理運営にも貢献され、昭和五十五年三月に定年退官を迎えられ金沢大学名誉教授の称号を受けた。その後、昭和五十五年八月に金沢医科大学教授に就任され昭和六十年三月に退官された。先生は横浜市立大学医学部、神戸大学医学部、鳥取大学医学部、東北大学医学部、金沢医科大学医学部、New York University-Bellevue Medical Center, Department of Dermatology など多数の大学で非常勤講師として教鞭をとられた。

た。

また、在任中は学術審議会専門委員、日本医師会疑義解釈委員会委員、金沢医師会副会長、日本皮膚科学会理事、日本皮膚科学会中部支部会長、日本医真菌学会理事、Vice-President, The International Society for Human and Animal Mycology, Emeritus Member, The International Society for Human and Animal Mycology, 日本結合組織学会理事など数々の要職を歴任された。

全国規模の学会としては、昭和四十年五月に第六十四回日本皮膚科学会総会、昭和四十三年十月に第十二回日本医真菌学会総会を主催された。また、昭和四十三年十月第十九回日本皮膚科学会中部連合地方会、昭和四十八年七月第五回結合組織研究会総会、昭和五十四年六月第一回北陸真菌懇話会を開催された。これらの業績により昭和五十年に第一回日本医真菌学会賞、昭和五十七年に北国文化賞を受賞した。

私にとっては、金沢大学皮膚科学教室の二代前の教授ということだけではなく、東京大学皮膚科学教室の大先輩でもある。福代先生が昭和十四年東京大学皮膚科学教室入局、私が昭和五十四年入局であるので、実に四十年上の先輩ということになる。東京大学皮膚科学教室入局後は、サルコイドーシス、真菌、悪性黒色腫などの領域で教科書や文献で福代先生のお名前を見ることはよくあったが、雲の上の人であり、ずっと直接にお話しする機会には恵まれなかった。ところが、平成四年に思いもかけず金沢大学皮膚科学教室の主任教授となることになり、同窓会で私の教授就任の歓迎会を開いて頂

けることとなった。そして、福代先生と直接話をする初めての機会がこの歓迎会である。忘れもしない、平成四年十一月二十七日、金沢ニューグランドホテルであった。私のほうが四十歳年下ということで、福代先生の私を見る目は「息子」というより「孫」という感じであった。大先生を前に大変緊張していたことは記憶しているが、どのような内容の話をしたかについては全く記憶にない。ただ、気難しそうな「学者タイプ」と考えていた私の予想は外れ、「物わかりのよいおじいちゃんタイプ」であり、予想と実際の福代先生のギャップに驚いた。

福代先生の業績は学問的なものだけではなく、数多くの優秀な皮膚科医を育成し、北陸三県はもとより、全国に輩出したことも忘れてはならないだろう。

また、金沢医科大学教授退官後も埼玉県に転居されるも、福代先生を囲む皮膚病理研究会が、富山県と石川県の方でつい十年ほど前まで開催されていたという事実は、福代先生の学問的リーダーシップの卓越さと、お弟子さんたちからの人望の篤さを物語っている。当教室は再来年の二〇一三年に創立一〇〇周年を迎え、福代先生にはその式典の名誉実行委員長をお願いし御快諾頂いた矢先の訃報であり、残念としか言いようがない。福代先生は九十七歳という天寿を全うされ、教室内一同、同窓会員一同、またその他関係者皆様とともに、心より御冥福を祈りたい。

故 根岸晃六先生を偲んで

脳情報分子学（旧分子神経情報学）教授 加藤 聖



した。そこで八年余に亘り、スウェーデン博士の右腕として網膜水平細胞に関する新知見を次々と発表されました。昭和四十五年四月に、当時新設の母校金沢大学医学部附属神経情報研究施設・情報伝達部門の初代教授として迎えられました。平成四年三月定年退官されるまで、二十二年の長きに亘り教室を主宰されました。

金沢大学名誉教授根岸晃六先生は、平成二十三年三月十六日に八十四歳の生涯を閉じられました。先生は埼玉県羽生市の御出身で、第四高等学校卒業後、昭和二十七年に旧制金沢医科大学を卒業され、附属病院での一年間のインターン研修の後、昭和二十八年当時の秋元波留夫教授（元本学及び東京大学名誉教授）の主宰されていた精神神経科教室の助手に採用されました。昭和三十二年に医学博士の学位を授与され、翌年昭和三十三年三月から、米国カリフォルニア大学ロスアンゼルス校医学部の著名なマグリーン教授、グリーン教授の下に留学されました。先生は当時流行の微小電極法を駆使し視床の電気生理学を学ばれました。その後昭和三十七年に南米ベネズエラに移られ、当時の網膜生理学の泰斗スウェーデン博士が活躍しておられたベネズエラ国立科学研究所の研究員になられました。

教授在任中の御功績としては、まず研究面では、帰国後直ちに網膜の電気生理学実験室を新たに整備され、当時不明であった網膜内の神経伝達物質の同定の実験を開始され、興奮性アミノ酸や抑制性アミノ酸、アセチルコリンの役割を明らかにされました。後半は、神経活性アミン、特に網膜ドーパミン細胞の機能として、網膜側性伝播を担う水平細胞のギャップ結合遮断の事実を世界に先駆けて発表されました。また、当時導入されだした免疫染色の技術をいち早く網膜に応用され、神経活性ペプチドの局在を明らかにされました。先生のお仕事を一言で述べるならば、「網膜内神経情報処理機構の解明」ということになります。先生の研究に対する取り組みは、常に真剣勝負であり、毎日早朝から夜遅くまで実験に没頭されました。小生などは入局早々に舌を巻き、音上げたものです。教育面では、医学科の三年生に対して

感覚生理学の講義を担当され細かな所まで板書されるなど大変几帳面な講義をされました。特に網膜の電気生理学では個々のニューロンの光応答電位とその意義について詳細にお話しされました。また学内の役職としては、神経情報研究施設長を長年務められ、十全医学会誌の編集長や医学図書館館長を歴任され、それらの管理・運営にも力を発揮されました。

次に先生の学会活動としては日本生理学会評議員、日本神経科学会専門委員を務められ、学術発表は基より、学会運営にも御尽力されました。その他国際眼研究会や谷口財団国際シンポジウムの日本側組織委員として、世界の研究者の招聘に大きく貢献されました。これは、長い海外経験（十二年間）を生かされ、多くの外国人研究者の知己を通じて成し得たことでした。在任中も沢山の外国人研究者（四十数名）が教室を訪問され大いに刺激を受けました。それら多くの海外の研究者との交流は今でも続いており教室の大きな財産となっています。

退官後の先生の足跡を振り返ると、先に述べた多くの海外の研究者から短期招聘を受けられ、平成四年から平成九年までの五年に亘ってカナダ、ベネズエラ、オランダ、ドイツと海外での網膜研究を続行されました。また、その間、日本医科大学解剖学教室の客員教授も務められ、この退官後の五年間で十五篇もの論文を著されました。これらの先生の長きに亘る研究活動、学会活動に対して、瑞宝中綬章ならびにオランダ王室芸術科学アカデミー賞が授与されています。

最後に先生の御趣味はプロ級のチョウ

の採集です。これは南米ベネズエラでの留学生活から始まったとお聞きしています。ベネズエラはオリノコ川流域、研究の合間の休暇には、遠くブラジルはアマゾン川流域まで、奥様と同伴で出かけられ、南米産の大型で色鮮やかなチョウを採集されました。それらを帰国時に持ち帰られ、自宅の一室をチョウの標本室に改造され、教室員にも時々そのコレクションを見せてくださいました。ベネズエラでの採集の方法については「ベネズエラに蝶を求めて五万キロ」という題で三篇の論文が、専門誌に掲載されています。このチョウの収集は旧鶴米町の「石川県ふれあい昆虫館」に「根岸コレクション」として約二千種一万頭が寄贈されており、この中には幻のチョウと呼ばれる「ブレネステブレボナ」など非常に珍しい標本もあり、国内屈指のコレクションとなつていきます。お近くにお出かけの折は是非見学して下さい。（現在は貴重な資料として保管されており展示はされておりませんが、希望すれば見学は可能です。）このチョウの採集にも先生の研究同様、一途でひたむきな姿勢が偲ばれます。

ここに先生から受けた数々の御恩に感謝しつつ、心より御冥福をお祈り申し上げます。



論説

我が国におけるトランスレーショナルリサーチの現在の位置づけ

トランスレーショナルリサーチセンター(TRC)金沢センター長 金子 周一

トランスレーショナルリサーチとは非臨床研究と臨床研究（臨床試験を含む）の「橋渡しをする研究」の総称である。欧米に比べ、我が国において遅れている研究とされている。第三期科学技術基本計画（平成十八年から二十二年）に従い、文部科学省は「橋渡し研究支援推進プログラム」を実施し、全国七か所に整備した拠点においてGCP（医薬品の臨床試験実施基準）に準拠する臨床研究等の橋渡し研究への支援を行った。本年の三月に開催された総合技術会議の総括によれば、今後の課題として各拠点の活動の一層の活性化と自立化を促進するとともに、地域性や開発ニーズの特性を活かし、各拠点を中核とした橋渡し研究ネットワークを構築し、研究成果の実用化の一層の促進を図る必要がある」としている。さらに、同会議は厚生労働省に対し「がん対策研究の推進にあたっては、基礎研究の成果を確実に活かすトランスレーショナルリサーチを着実に進め、成果を社会に還元すべきである」としている。

開発していくことが重要であり健康研究（橋渡し研究・臨床研究）を総合的に推進することが不可欠である」としている。このように、後述するいくつかの課題にもかかわらず、トランスレーショナルリサーチは我が国の「成長」を支える重要な研究と考えられている。

金沢大学におけるトランスレーショナルリサーチ体制の整備

金沢大学においても先の科学技術基本計画をうけ、平成十七年にトランスレーショナルリサーチセンター（TRC）設置準備ワーキング・グループが発足し、平成十九年にTRC規定、運営委員会規定が作られた。トランスレーショナルリサーチの実施には、人に適用する妥当性が倫理的かつ科学的視点から公式に認められることが必須となる。当然、関連する各種の指針を遵守し適正な倫理審査のもとに研究が実施されなければならぬ。さらに、努力目標としてGCPに準じるよう体制を整備していくべきであるとされており、GCPに基づいて医薬品の臨床を扱う一連の作業の安全性と品質が、高いレベルで保証される必要がある。

求められる基準に適合する施設の整備

が必要となり、旧帝大を中心にGCPに準拠した細胞プロセッシングセンター（CPC）を有する施設が次々に設置された。金沢大学も「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を目指しており、これを整備する必要があると判断し、平成十九年に北陸で初めてCPCを有する「TRC金沢」が学内措置として付属病院の地下に設置された。そして、再開発に伴い取り壊される古いTRCに代わって新しいTRCが三月に新病院の外來棟の地下に移設され発足することとなった。新しい施設では、二つのラインが平行して実施できる構成になっている。

この施設では、GCPに準じて各部屋の清浄度や室圧の管理、環境バリデーション、機器バリデーションの実施、および、環境測定、細胞の品質保証、さらに十を超える基準書やマニュアルなどの文書体系の整備と管理などが求められる。実施にあたって、倫理審査などは勿論のこと、標準作業書に基づいて厳格に作業が行われなければならない。研究者、作業員は実行するための研修も求められる。

トランスレーショナルリサーチの課題

文部科学省の「橋渡し研究支援推進プログラム」は八〇億四、八〇〇万円の予算を使用し、各拠点において最低二件のシーズ（合計十四件）を治験まで到達させる目標を設定して開始した。拠点ではサポート機能を配置し、きめ細かなマネージメント体制を構築することで基礎研究の成果を臨床に繋げるためのパイプラインを構築した。しかし、着実な成果をあげつつあるものの、治験まで到達し

たシーズ数は残念ながら五件にとどまった。

先述のように、これらの拠点ではさらなる研究の推進を求められている。しかし、施設とマネージメント体制の維持には高額の費用が必要であり、自立して研究を行うことは容易でない。今後も公的資金によって費用をまかなうか、産学の連携によって費用を確保するか、あるいは拠点にとって必要な経費として本体の機関が費用を充当するかなどが課題となっている。

金沢大学のTRCは、残念ながら、重要なサポート、マネージメント体制を構築する専属の職員が配置されていない。研究者がこれらを実行するには大きな無理がある。また、本質的な課題として、幹細胞を用いた再生医療、免疫細胞を用いたがん治療など、開発ニーズの特性を活かした研究成果の実用化を推進できるかが重要である。

今後の展開

旧帝大に比べて規模は小さいが、金沢大学の基礎研究の成果をもとに、新しい治療法や医薬品などを開発していくTRCが整備された。中村学長が言われるようにベストテン大学に入るには必須の施設といえる。課題は多く苦労も多いが、金沢大学から我が国の「成長」を支える「イノベーション」を世界に向けて発信できる日を期待したい。

病院紹介

市立輪島病院

はじめに

輪島市は、石川県の北部に位置し能登半島の北端にある日本海に面した市で、輪島塗、朝市、御陣乗太鼓が有名です。人口は約三万人で六十五歳以上の高齢者が人口の約三十五%に達しています。市立輪島病院は入院施設を有する市内唯一の医療機関で、病床数は一九九床（一般病床一四六、療養病床四十九、感染症病床四）、診療科目は内科、精神科、小児科、産婦人科、外科、整形外科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科を有しています。また、石川県で唯一離島にある舳倉診療所のほか西保健療所、南志見診療所を併設しております。常勤医師は、内科八名（うち舳倉島診療所勤務一名）、外科三名、整形外科二名、小児科一名、産婦人科一名、泌尿器科一名の計十六名で、救急対応や専門医療から「かかりつけ医」としての一般診療、介護から看取り、保健衛生まで担っております。

沿革

昭和十八年、輪島町を中心に鳳至郡輪島郷七カ町村により病院建設促進協議会が結成され、現在の輪島市中心部の河井町に「日本医療団輪島病院」の創立が決定し住民約三万人の勤労奉仕を得て整地に着手しました。昭和十九年に本館兼診療棟が竣工し、翌年一般病床五十床の病

棟が竣工して病院が完成しました。住民の大きな期待を担って輪島病院の歴史が始まりました。その後、名称は四回変更され平成七年から「市立輪島病院」と改称しました。平成九年、山岸町に新築移転し現在に至っております。また、地域医療の推進を図るため昭和二十一年に西保健療所を、昭和三十年に舳倉診療所を開設しました。平成十五年三月には地域の開業医が閉院されたため、南志見診療所を新たに開設いたしました。

病院の現状と取り組み

市立輪島病院は「心の通う医療サービスの提供」を第一義とし、住民に信頼され、高度かつ良質の医療を提供し健全経営を堅持することを基本理念に謳っております。地域と深くかわり、誕生から介護と看取りまで、その間の救急医療、専門医療から「かかりつけ医」的日常診療を担っています。

特に当院は産婦人科医と小児科医の協力のもと周産期に力を注いでおります。自然分娩とフリースタイル分娩を推奨し、出産後は母子同室とし母乳育児を推進しています。退院後も母乳育児を支援するため、毎月一回、母乳育児支援地域連絡協議会を開催しています。メンバーは輪島市や能登北部保健所の母子担当の保健師、保育所長、当院の産科スタッフ、小児科医師等です。これらの取り組みが認められ、平成二十年に石川県で初めてWHOユニセフから「赤ちゃんにやさしい病院」の認定を受けました。

一方では、入院患者の高齢化も顕著になってきております。平成十五年に療養型病床四十九床を導入しました。しかし、

退院後に自宅に帰っても介護する方がいないなど、在宅医療への移行の問題が見られるようになり施設や行政との連携が重要となってきました。このため、院内外の連携を強化し、入院中から退院、そして在宅医療に至る一貫したサービスの提供を推進するために平成二十二年に在宅医療連携室を地域医療連携室に改め機能強化を図りました。他施設との交流や行政への積極的な働きかけは、行政機関が主体となって市民の医療介護を包括する「輪島ケアネット」の会発足に至りました。

当院ではNST活動にも力を注いでおり、平成十六年に日本静脈経腸栄養学会・NST稼働施設認定を受け、平成十九年に認定教育施設に認められました。食事を摂ることが基本であり最上の喜びでもあると考え摂食嚥下口腔ケアチームを立ち上げ、歯科・口腔外科医師の協力をえて嚥下機能の評価とリハビリ、口腔ケアの実践と有効性の啓発活動を行っております。

医療を安定的かつ継続的に提供するためには健全経営を堅持することが必要です。平成二十一年二月に病院改革プランを策定し経営効率化に取り組んでおります。DPC対象病院となり、院内画像配信システムを導入し、後発医薬品の使用を促進しております。当初は平成二十三年度の不良債務解消を目指しておりましたが、一年前倒しの平成二十二年度で達成するだけでなく、単年度黒字化も達成できる見込みです。

しかし、改革プランのなかで医師・看護師確保が最も重要であり難題です。看護師修学資金制度の活用により安定的な

看護師確保の見通しが立ちつつあります。平成二十五年度には院内保育所の開設を予定しており医師につきましても、金沢大学と石川県のご協力により常勤医師を増員していただき、専門外来の開設にもご助力いただきました。

石川県の地域医療再生計画で取り上げられている能登医療圏、中央医療圏との連携強化のため、当院は平成二十三年度に電子カルテの導入を行い今後のネットワーク化に対処する予定です。当院は初期研修協力医療機関として「地域医療」を担当しており、これまで多数の研修医が来られています。また、平成二十五年度には宿泊機能とテレビ会議システムを有する研修センターを開設する予定で、輪島にしながら金沢大学で開催されるカンファランスに参加できるようになればと期待しているところです。

当院は、地域の医療機関や行政機関等との連携を図りながら必要な医療提供体制の確保に取り組んでおります。どうぞよろしく願い申し上げます。

平成十九年の能登半島地震では断水によつて透析治療を中断することとなりました。突然の転院透析に快諾された医療機関の皆様によつて多数の命が救われました。ありがとうございました。また、先の東日本大震災で被災された皆様に見舞い申し上げます。微力ではありますが可能な限りの支援を行ってまいりたいと存じます。

(院長 品川 誠 記)

病院紹介

厚生連高岡病院

当院は昭和十一年に富山県産業組合高岡病院として現在地（昔は高岡市ではなく射水郡佐野村木津）に設立された病院です。昭和十三年に制定された国民健康保険法がまだない時代で、設立当初はただ貧しかった農民の厚生事業として始められています。病院は病室七十三室、収容人員は七十八名で当時としては県下で最も近代的な大規模病院でありました。開院当初から高岡駅から病院までの病院バスを運行しており現在も病院バスが運行されています。昭和二十六年に農協高岡病院に名称変更（一六八床）されています。更に昭和五十年厚生連高岡病院に名称変更され現在に至っています。（現在許可病床数は六八一床、稼動病床数は五六一床）。それ故、いまでもお年寄りには産組病院、農協病院といった方が馴染みがあるかもしれません。昭和六〇年三月より臨床研修病院指定を受け、昭和六十二年ICU・CCU・NICU開設、平成九年より救命救急センター指定、地域周産期母子医療センター認定を受けています。平成十一年より訪問看護ステーション開設、平成十四年地域医療連携室開設、同年に他の病院にくらべ比較的早くがん治療のための外来点滴センターを開設しています。平成十五年回復期リハビリテーション病棟開設し、平成十六年に電子カルテ導入を行っています。平成十七年よりDMAT病院

指定、病院機能評価認定を受けています。平成十九年地域がん診療連携拠点病院指定を受け総合的がん診療センター開設。平成二十年よりDPC病院となっています。現在、当院は一般病床六八一床でICU十四床、NICU九床、CCU六床を持ち、二十一診療科のある第三次救急病院として呉西地区の中核病院としての役割を果たしています。現在職員八五三人（医師九十九名・看護師四九〇名）、一日外来患者数約一、〇四四人（救急患者数二十七人・救急車六台）、年間入院患者数約一五、三七一人（救急患者入院二、三二六人）、年間手術件数四、一五六件、平均在院一三・三日、病床利用率八二・一％の現状です。また病院に併設された健診センターを持ち年間五、〇〇〇名の日帰りドックも行っています。

当院の最大の特徴は、一九九五年より富山県呉西地区の唯一の三次救命救急センターとして三六五日二十四時間体制を維持していることです。特に救急外来には麻酔科医が常駐しており、救急車で患者が搬送された時には最初に麻酔科医が診察して必要に応じて内科医や外科系医師に振り分けるシステムを取って効率的で質の高い救急医療を行っています。また放射線科医も当直して緊急時のCT、MRIなどの画像診断をすみやかに行える体制もっており、県内でもトップレベルの救急体制をとっています。また、救急に関しては院内のみならず院外に対しても積極的に対応しています。十年まへの神戸・阪神大震災の時に初めて医療チームを二チーム神戸に派遣しましたが、現在当院にはDMATチームが三

チーム編成されており県内では最も数が多く充実しています。能登沖地震や中越沖地震、岩手・宮城沖地震にも出動した実績があります。平成二十二年三月には当院を中心に中部地区DMATの大規模な災害訓練が行われました。

また当院では総合的がん診療センターを開設しており、呉西地区のがん治療拠点病院の重要な役割を果たしています。総合的がん診療センターでは、北陸ではまだ少ないがん薬物療法専門医を中心にがん診療をおこなう専門医、がん治療認定薬剤師、認定看護師のチーム医療が行われています。平成二十一年からは化学療法を専門に行う腫瘍内科と緩和ケアの専門外来を設置しがん治療の充実に努めています。

急性期病院としての病院機能を発揮するために、当院では地域医療連携を促進するために県内でも早く平成十二年から地域連携室を立ち上げています。また、平成十七年より地域医療連携を促進するためにセキュリティが確保された厚生連高岡病院と開業医とのインターネットを利用したオンデマンドVPNネットワークを立ち上げ診療情報の交換、検査予約、診療予約などがなされるようになりました。平成十九年四月よりネットワークに高岡市内の他の公的病院も参加し「高岡れんけいネット」として発展しています。平成二十三年三月から電子カルテ情報の閲覧ができるよう改善し、さらに病診連携を強めていきたいと思っています。

平成二十二年には病院機能評価の更新のための受審と電子カルテの更新が重なり大変な一年でしたが職員一同の頑張りで無事終わりました。

現在、平成二十三年一月より外来棟、救急外来、画像診断部の病院改築工事が着工され平成二十六年四月に完成予定となっています。

以上、当院の現状をお知らせしましたが他の病院と同じように勤務医の過重な負担に救急体制が成り立っており、医療崩壊を防ぐためには国、県の財政的な事を含めた更なる強力な政策が必要と思われます。

（院長 亀谷 富夫 記）



教室だより

神経分子標的学講座

(旧第三解剖学講座)

研究分野の沿革

昭和二十八年七月、本陣良平助教が初代講座主任として着任され、研究室としての活動が始まりました。その後、昭和三十三年から松田健史助教授、昭和五十一年から高橋暁助教授、昭和五十六年から中村泰尚教授、平成二年から工藤基教授、平成十一年から小川智教授が教室を担当されました。平成十三年、大学院局化とともに講座名が脳医科学専攻神経分子標的学講座となり、平成二十一年から私(堀修)が七代目講座主任(四代目教授)として教室を担当させて頂いております。現在、教員三名、技術職員一名、事務補佐員一名、研究生二名、大学院生二名が所属し、教育(神経解剖、発生学担当)及び研究を進めております。



研究の紹介

現在、私たちの教室では脳梗塞を含む脳血管性障害や神経変性疾患に共通して起こる「神経細胞死」のメカニズムを解明し、それらを新たな神経保護薬の開発に繋げる取り組みを行っております。その中で、私たちが特に注目して来たのがアストロサイトと言うグリア細胞です。これまで、アストロサイトは神経細胞の補助的な役割を担っているに過ぎないと考えられて来ましたが、ストレス環境を生き延びる為のツールを数多く持ち、ストレスに脆弱な神経細胞を保護している他、脳血管の裏打ちをする事で血液脳関門の維持にも深く関わっています。今回は、アストロサイト由来ストレス制御遺伝子、及びストレス制御化合物による神経細胞死阻止に関する研究、そしてアストロサイトの活性化制御に関する新規遺伝子についての研究を紹介いたします。

一、小胞体ストレス応答遺伝子と神経保護

私たちは、神経細胞に比し虚血ストレスに強いアストロサイトを低酸素暴露する事により、GRP78, GRP94, ORP150等といった、小胞体に局在する分子シャペロン(小胞体ストレス関連蛋白質)の発現が誘導されることを発見しました。小胞体は、カルシウム恒常性の維持、脂質の代謝、そして分泌系蛋白質の生合成等を行う小器官ですが、重要な細胞内ストレス応答の場でもあります。細胞内環境の悪化により、エネルギー枯渇(低酸素・虚血)、カルシウム恒常性の破綻、蛋白質の修飾異常等が発生しますと、小胞体内に構造の乱れた蛋白質が蓄積し、小胞体ストレスと呼ばれる状態に陥ります。しかしこの時、unfolded protein response (UPR)と呼ばれる細胞内シグナルが活性化

され、小胞体救済反応が誘発されます。すなわち、一、小胞体における負担を軽減する為、蛋白質合成は抑制されます。二、小胞体環境を改善する為、小胞体局在型の分子シャペロンや酸化還元遺伝子の発現が増加します。三、小胞体内に蓄積した蛋白質を除去する為、蛋白質分解系(ユビキチン・プロテアソーム系)に属する遺伝子の発現が増加します。私たちは、低酸素暴露した培養アストロサイトから上記小胞体分子シャペロンの他にも複数の小胞体ストレス関連遺伝子をクローニングし、それらの発現が脳梗塞時に上昇することを確認しました。更に、新規小胞体分子シャペロンORP150のトランスジェニックマウス、ノックアウトマウスを作製して個体レベルでの解析を行った所、ORP150を神経細胞に強制発現させたトランスジェニックマウスは、野生型マウスに比べて脳虚血に対して抵抗性を示すことが明らかになりました。同様のORP150の細胞保護効果は、脳虚血以外にもマウスパーキンソン病モデルやマウス腎虚血モデルにおいても認められました。これらのことは、UPRが神経細胞の生存に重要な役割を果たしている可能性を示唆するものであります。現在、ORP150の発現誘導にも関与するUPRの主幹(マスター)転写因子ATF6及びXBP1sのノックアウトマウスを用いて更なる検討を行っております。

二、小胞体ストレス制御物質と神経保護

ORP150解析の結果から、私たちは小胞体ストレスを制御する化合物が新たな神経保護薬開発の標的になるのではないかと考え、小胞体ストレスに対して脆弱性を示すFragile X欠損細胞を用いた小胞体ストレス制御物質の探索を行いました。その結果、柑橘類の果皮に多く含

まれるフラボノイド、タンゲレチンがUPRの経路であるPERK/eIF2α/ATF4を緩徐に活性化し、小胞体ストレスを制御する事が明らかになりました。タンゲレチンは、小胞体ストレス誘導剤の他、パーキンソン病モデル薬剤である神経毒MPTPに対しても細胞保護効果を有しております。

三、アストロサイト活性化の制御に関する新規遺伝子について

既に述べましたように、アストロサイトは神経細胞の単なる補助的存在ではなく、障害された脳で活性化し、神経細胞の生存、組織の修復に積極的に関与しています。私たちはアストロサイト特異的に発現する新規分化関連遺伝子Ndrp2(N-myc downstream regulated gene2)が、脳虚血やパーキンソン病におけるアストロサイトの活性化に重要な役割を果たしている可能性を見出しました。現在、そのメカニズムを個体レベルで解析すると共に、Ndrp2が神経細胞の生存、活動にどのような影響を与えているか検討しております。

終わりに

今回御紹介させて頂いた研究の他にも、共同研究の形で、脳虚血やパーキンソン病をターゲットとした複数の研究を行っております。今後、これらの研究を通じて、臨床医学をゴールとした基礎的研究(トランスレישショナルリサーチ)を進める事が出来ればと考えております。微力では御座いますが、何事にも全力で取り組む所存で御座いますので、同窓会会員の皆様の御指導、御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(堀 修 記)

心肺病態制御学

(旧第一外科)

本教室は一八八三年に開講され、約百三十年におよぶ歴史を持つ伝統ある外科教室です。心臓血管外科、一般消化器外科、呼吸器外科すべての外科領域を網羅する大外科制の教室で、北陸を中心として全国各地に、第一線で活躍する外科医を多数輩出しています。そして、多くの関連病院と同門の先輩方に支えられ、教室は発展してきました。昨年は、第九代教授として渡邊剛教授が教室を主宰されてから十年目という節目の年になりました。十一月には多くの著名人の方々にお集まりいただき、開講十周年記念式典を盛大に執り行い、教室の益々の発展を誓ったところです。

また、これまで教室は北陸の地域医療を支えてきましたが、二〇一〇年八月には能登地区の医師不足対策として石川県の寄附講座が設置されました。「地域医療心臓・総合外科講座」として大竹裕志特任教授が就任し、輪島地区を中心に能登の医療改善に貢献しています。

【診療】 心臓血管外科

成人心臓外科、先天性心臓疾患外科、血管外科からなり、年間四〇〇例を超える手術を行っています。心臓外科部門の超低侵襲手術手技では他に類を見ない高い技術を誇り、世界でも屈指の手術成績をあげています。冠動脈バイパス手術(CABG)はほぼ全例で人工心臓を使用せず心拍動

下の手術を行い、全身麻酔を必要としない、局所麻酔による覚醒下手術も本邦で唯一行っています。また、いち早くロボット手術支援システム(da Vinci)を用いた先進的心臓手術にも取り組み、二〇一〇年には一〇〇症例を超えました。血管外科部門では、従来の手術に加え、放射線科との連携により、本邦に先駆け大動脈瘤に対して血管内ステントグラフト治療を開始し、良好な成績を達成しています。

呼吸器外科

肺癌を中心に呼吸器外科疾患全般を対象に年間三〇〇例近くの手術を行っています。低侵襲手術を推進しており、内視鏡手術を行っています。また、進行肺癌に対する化学療法・放射線療法を併せた複合的な治療、中心型早期肺癌に対するレーザー治療・気管支腔内照射・光線力学療法、気道狭窄に対するステント治療なども行っています。気管支鏡検査でも北陸随一の検査数を誇り、苦痛のほとんどない検査を実践しています。

内分泌・総合外科

甲状腺・副甲状腺疾患、消化器一般、ヘルニアなどを対象として治療にあたり、手術件数は年間二〇〇例にのびります。すべての疾患でSingle Incision Laparoscopic Surgeryを含む内視鏡手術やロボット手術を導入し、低侵襲手術では北陸の指導的立場にあるといえます。遊離空腸移植による頸部食道再建術では本邦でトップレベルの移植成功率を得ています。

【最近の研究】 心臓血管外科

心臓外科領域では、不整脈外科治療に関する研究として、術後心房細動に対しラジカ波心外膜アブレーションを行うための

新しい心房壁固定用吸引補助器具を開発し、その有用性を証明しました。CABGに関する研究として、超低侵襲手術開発を目的に、剣状突起下からの新しい内胸動脈採取法を開発しました。また、移植グラフトに与えるRho-kinase Inhibitorの影響を解明し、最適なグラフト血管弛緩法を開発しました。さらに、超音波凝固メスによる動脈グラフト採取法が血管内皮の一酸化窒素産生に与える影響を研究し、その有用性を証明しました。心臓移植に関する研究として、微弱電磁場冷却装置を使用した零度以下の長期心臓保存の研究を行い、二十四時間保存を達成しています。

血管外科領域では、血管新生に関する研究、ステントグラフト挿入術に関連する研究、新しい動脈脈波解析に関する研究、血管外科におけるda Vinci導入に関する研究などが行われています。また、金沢工業大学と連携し、医工融合による、血管内皮細胞で被覆した細径人工血管の共同開発に取り組んでいます。

呼吸器外科

移植・呼吸器再建分野では、キトサンナノ繊維管による胸腔内自律神経機能再生に関する研究を行い、断裂した交感神経や横隔神経の再生を確認しました。また、微弱磁場環境下におけるサブゼロ肺保存法や心膜周囲脂肪織などの各種組織片被覆が気管支断端に与える影響を研究しています。腫瘍学分野では、がん研究所腫瘍外科と連携し、肺癌におけるDNA global methylationの定量とゲノム不安定性の関連解析を行い、肺癌においてLINE-1 hypomethylationが新規の予後不良因子であることを明らかにしました。また、mammalian cell内に存在する酵素である

mTORに悪性細胞の発育抑制効果があることに着目し、がん研究所腫瘍内科と連携して、悪性胸膜中皮腫に対するmTORを標的とした分子標的治療薬の有用性を証明しました。低侵襲手術分野では、肺切除において開胸法や手術手技の違いが術後免疫能に与える影響を研究し、胸腔鏡手術の低侵襲性を証明しました。

内分泌・総合外科

遺伝子治療を含む化学療法の研究、創傷治癒・栄養の研究などを行っています。また、da Vinciを用いた術式の開発として、甲状腺手術や胃内手術(NOTES (Natural Orifice Transluminal Endoscopic Surgery)腸管吻合法に関する研究を行い、ロボット手術の有用性を示しました。

【教育】

医学科では臨床医学として「循環器」「呼吸器」「栄養・消化器」「腫瘍」の総論と各論の講義を担当しています。また、基本的臨床手技実習やBedside learningを通して外科学の臨床診断・実技を身に付けてもらっています。応用臨床実習では学生たちに実際の臨床を体験してもらい、実際の医療技術を身につけられるよう力を注いでいます。さらに博士論文の研究指導のほか、毎週二回、約一時間の教室全体の勉強会を行い、抄読会やリサーチカンファレンスを行っています。

私たち心臓・総合外科教室は、渡邊剛教授のもと、同門の諸先輩方のご協力をいただき、教室員一同が力を合わせ一層の研究に励む所存です。今後とも皆様のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

(松本 勲 記)

学会報告

日本予防医学学会学術総会

第八回日本予防医学学会学術総会は、平成二十二年十二月十一日(土)から十二日(日)の日程で、金沢大学医薬保健学域医学系脳・脊髄機能制御学(脳神経外科)の濱田潤一郎教授を会長として、同環境生態医学・公衆衛生学の中村裕之教授を副会長として、石川県立音楽堂にて開催されました。海外からの発表も含め、延べ約二〇〇名の参加者を迎え、今後の予防医学の発展の一助となる有意義な討論がなされました。

本学会は予防医学を包括的に捉え、従来からの基礎的・臨床的予防医学研究に、健康補助食品、機能水、鍼灸、漢方、薬剤などの分野を加えて、予防医学・予防医療の確立を目指して設立されました。今回の学術総会では日本成人の三大疾



病のひとつである脳卒中を中心に据え、「基礎と臨床の融和―脳疾患の予防―」をシンポジウムのテーマとして取り上げました。シンポジウムの第一部では第十七回日本脳ドック学会会長を務められた東北病院の渡邊一夫先生に「予防医学としての脳ドック」、自治医科大学附属さ

いたま医療センター神経内科教授の植木彰先生に「生活習慣病によるアルツハイマー病の予防」、富山大学保健医学講座准教授の関根道和先生に「社会経済的要因による脳卒中危険因子の格差―日本・英国・フィンランドの国際比較研究の結果から―」、そしてN.T.T.東日本関東病院リハビリテーション科部長の稲川利光先生より「脳卒中のリハビリテーション」急性期からの課題」についてのご講演をいただきました。予防医学のめざましい進歩をあらためて認識させられるとともに、参会者を加えての活発な質疑応答がなされ、現在の予防医学における課題が提示されました。

また、一般演題では、まさに本学会の主旨に則り、ウイルス感染などの基礎的な演題からメタボリックシンドロームなど臨床的な演題、更には社会医療制度における地域医療システムに関する演題まで、幅広い分野の演題が約四十題発表され、様々な予防医学の問題が活発に討論されました。

学術総会一日目には、しいのき迎賓館において懇親会が催されました。本学会相談役の池口恵観高野山真言宗伝燈大阿闍梨、金沢大学学長の中村信一先生をはじめとして多くの先生より本会の発展を期する暖かいお言葉をいただきました。また、本学会理事長、前広島大学学長の

原田康夫先生による、すばらしいオペラの熱唱も拝聴させていただき、参会者の親睦を深める非常に有意義な時間となりました。

今回の学術総会の開催にあたり、金沢大学脳神経外科同門会、関連施設、金沢大学十全医学会、および金沢大学脳神経外科、公衆衛生のスタッフを始め、多くの方々にご支援をいただきました。皆様には心よりお礼を申し上げます。
(脳・脊髄機能制御御学 林 裕 記)

支部だより

静岡支部

平成二十二年七月三十一日静岡県支部総会が静岡市内で開催された。例年より少し早めの開催であったが新築なった静岡市葵区のブクトウカイ二十四階の会場で十九名の御出席のもと開催された。本部より理事長御就任の加藤聖教授に御出席戴きました。

松田保秀支部長の御挨拶があり、引き続き加藤理事長先生より、最近の大学、医学部、附属病院の発展の状況をスライドを用い御覧戴きました。又先生の御研究の一端も映像を含め御説明、御紹介戴き会員一同感銘を受けました。

その後、御出席の先生方の現状報告並びにコメントを戴き、今後の会の発展等についての御意見も戴きました。

その様な御意見を踏まえ、松田支部長の御発案、御指示により支部総会終了後に、新たに支部の会則を発効し、又東部、



中部、西部の幹事を選任し、会の発展を促す事になりました。今後の会の発展を願いたいと思います。

各地区の幹事は下記の通りです。

東部地区…加藤政利先生、片桐浩久先生

中部地区…佐野勉先生、深澤洋幸先生、池谷直樹先生、土屋和弘

西部地区…松下文昭先生、金田武志先生、岡井高先生

当日御出席戴きました先生方は次の通りです。(東部) 竹内健先生。(中部) 竹内正和先生、水野洋一先生、佐野勉先生、佐野三枝子先生、深澤洋幸先生、東茂樹先生、池谷直樹先生、石神直之先生、大場範行先生、富松功光先生、加藤裕之先生、藤田倫匡先生、土屋和弘。(西部) 長林勝彦先生、松田保秀先生、松下文昭先生、岡井高先生。

(土屋 和弘 記)

三重支部

平成二十二年度十全同窓会三重支部総会は、平成二十三年二月十一日(金祝日)に津市内で行われました。本年度総会には十人の会員が出席しました。

総会では三重支部長の水本龍二先生からご挨拶があった後、懇親会に移りました。懇親会も和やかな雰囲気の中に終わり、閉会となりました。現在、三重支部の会員数は二十八人です。(山門亨一郎 記)

写真 後列左から…黒川義博(平成二十一年卒業)、春木祐司(平成十七年卒業)、中瀬玲子(昭和六十二年卒業)、山門亨一郎(昭和六十二年卒業)、大石晃嗣(昭和六十三年卒業)、前列左から…伊藤敏秋(昭和五十二年卒業)、野口孝(特別会員)、水本龍二(昭和三十年卒業、支部長)、原田資(昭和四十六年卒業)。祖父江直久(昭和五十一年卒業)。



医師会コーナー

金沢市医師会紹介 ―新しい医師会のあり方を目指して―

金沢市医師会理事 羽柴 厚(羽柴クリニック院長)

一、金沢市医師会の沿革

平成十年に発刊した金沢市医師会史によれば、金沢市医師会は明治四十年に発足し大正九年一月に法人格を取得した。医師会館建設を目指し紆余曲折の末、昭和三年十一月三日に現在の大手町の地に金沢医師会堂として落成した。この地は金沢医学館(金沢医学専門学校)跡地であり、石川県の西洋医学発祥・普及の源泉地として当会会館建設に意義深い場所として時の県知事(長 延連)に願ひ出たと記されている。その後第二次世界大戦終戦に伴い昭和二十二年十一月一日付で現在の社団法人金沢市医師会が認可され現在の金沢市医師会としてスタートした。米村貞知初代会長から小山 信第十二代会長まで六十数年にわたり金沢市民への地域医療・保健へ貢献すべく活動している。

二、金沢市医師会活動の概況

当会では会長、副会長(二名)理事(三十名)、代議員、予備代議員、監事(三名)などで構成されており、以下の組織分けにより活動を行っている。

一、広報部 二、ハートネット部 三、学術部 四、企画調整部 五、保険部 六、保健事業部 七、地域医療部 八、長寿・障害者福祉部 九、救急・災害対策部 十、学校医部 十一、勤務医部 十二、医業経営部 十三、看護部 十四、親睦部 十五、病院・有床診療所部 十六、医政部 十七、文化部 十八、経理部 十九、総務部
中でも金沢市医師会が金沢市の委託を

受けて行っている住民検診『すこやか検診』は老人保健法に基づき昭和五十八年から一般検診、胃がん検診、子宮頸部がん検診として開始され、乳がん・甲状腺がん、肺がん、大腸がん、肝臓がん、前立腺がん、聴力検診、緑内障検診と順次対象疾患の拡大、対象年齢・検診方法の見直しが行われてきた。各検診にはそれぞれ担当理事が縁の下力持ちとして精力的にマネージメントを行っている。また各検診には精度管理委員会を設置し基幹病院、大学病院の専門医を委員・委員長として登用し検診発見症例の検討、検診結果の解析を行っている。当会では肺がん・胃がん・乳がん検診では検診医療機関で撮影された画像(レントゲンフィルム、内視鏡画像)を医師会の読影委員会にすべて集め、各領域の専門医による読影を行っている。かかりつけ医(二次検診医)による一次読影、専門医とかかりつけ医(乳がん検診では撮影技師)がペアになり二次読影を行い、さらに要精検にかかわる症例についてレフリー判定を行っている。これは『金沢市医師会方式』として全国的にも高い評価を受けている。かかりつけ医と地域の基幹病院、大学病院が住民検診をキーワードとしてすばらしい病診連携、地域連携が行われている。これらの高い評価に基づき、昨年度から国立がんセンター、金沢市と共同で『大腸がん検診受診促進企業連携事業企画』を行い本年度も継続して行うことが決定している。また先進的に平成二十年度から導入した胃内

視鏡検診ではその精度管理の手法が全国的にも注目されており、内視鏡検診の普及に向けて当会としても『金沢市医師会方式による検診精度管理』を是非全国的に発信していきたいと考えている。

そのほか予防接種事業に対する積極的な協力、大規模災害に対する体制作り、各種学術集会、卒後研修セミナー、学術セミナー、実習の企画、夜間・休日診療の体制づくり、広報事業、ハートネット(医師会イントラネット)事業などが各担当チーフの献身的な思いにより実施されている。医師会は開業医の利益追求団体と思われがちであるが、当会は病院勤務医、研修医の先生方、女性医師の参加しやすいシステムの構築に向けて各担当が努力をしている。これからも医療の専門集団として共に手を携えて活動していきたい。また先に触れた金沢医学館を記念して金沢医学館記念基金を創設し地元で活躍する若き研究者の業績を顕彰している。

三、公益法人化への思い

平成二十年十二月から新公益法人制度が開始され当会も平成二十五年までに新法人への移行手続きが必要になる。当会としては、現在の活動内容から公益性の高い事業が多いと考え検討委員会の見解を踏まえ公益法人を目指し準備を進めている。地域医師会としては高いハードルではあるものの、高い志を持って今後の医師会活動を継続し、後代に継承してもらいたいと考えている。

医療費削減を錦の御旗に行われる政策による診療報酬の定め方をはじめ医療に関する国民に要望の変化により医療情勢がますます混沌とし、さらなる展望のない医療現場となりそうな状況となっている。こうした閉塞感の高まった医療環境に対し

医師国家試験結果

医学部長・医学類長 井関尚一

第一〇五回医師国家試験の合格率は新卒者、既卒者合わせて九十三・二％であり、昨年の八十七・五％から大幅にアップするとともに、全国平均の八十九・三％を上回りました。大学別順位では全国八〇校中二十二位、国立大学四十三校中十四位、さらに新卒者だけで見ると、合格率九十八・二％で順位は全国九位、国立大学三位でした。近年にない好成绩を挙げた卒業生の健闘ぶりに拍手を送りたいと思います。

学業成績は多分にその学年の個性を反映するものであり、来年度以降も好成绩が続くという保証はありません。しかし、本学が特別な国家試験対策授業というものを行わず、学生の能力を信頼して自主的な対策にまかせた結果が吉と出たことの意味は大きいと思います。今回改訂された医学教育モデル・コア・カリキュラムにおいて、医師としての基本的な資質として、高い総合的診療能力や地域医療への貢献と並んで、研究者志向というものが挙げられています。一五〇年の伝統をもつ本学としては、研究マインドの涵養も含めた本来の医学教育をしっかりといひ、単に医師国家試験成績を良くすることのみならず、全国や世界で活躍する医師・医学研究者を育てることが、引き続き求められていると思います。

が夢を語れる活動の場を構築していききたい。これからさらなる真価が問われている。

近年、臨床実習開始前の知識と技量を保証するための共用試験（CBTとOSCE）がより重視される傾向にあります。本学でも教育委員会において、CBT成績を四年次から五年次への進級判定のため正式に採用することを検討しており、これと並行して基礎・臨床を含めた専門科目の授業を全体として前倒しして四年秋までにひと通り終了させる新カリキュラムが決定しました。各学年における進級や卒業の判定を厳しく行うことが、学生の知識の段階的積み上げを保証し、国家試験成績の向上にもつながると思います。教員の皆さんのご協力をお願いします。

第105回医師国家試験結果 ※（ ）内は第104回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成23年3月 卒業生	103名 (99名)	101名 (91名)	2名	98.1% (91.9%)	92.6% (92.8%)
平成22年3月 以前の卒業生	13名 (13名)	7名 (7名)	6名	53.8% (53.8%)	60.2% (52.4%)
合 計	116名 (112名)	108名 (98名)	8名	93.1% (87.5%)	89.3% (89.2%)

謝恩会

今回、僕たちの卒業において、謝恩会を開催できたことを嬉しく思います。三月十一日には、東北を中心として、とても大きく大きな被害をもたらした東日本大震災があり、日本だけでなく世界中が大きな悲しみに包まれました。これを書いている現在も、まだ出口は見えていません。一日でも早い復興を祈っています。さて、そんな中で、卒業式と謝恩会を無事に開けたことはとても幸せで感謝しなければならぬと思います。まず、医学類長の井関教授からご挨拶があり、微生物学の清水教授からお話があった、医学系長の松井教授による乾杯が行われました。そのあと、出席していただいた先生方と色々な話をして盛り上がり、途中には、学生によるヴァイオリンとピアノの素敵な演奏が行われました。演奏してくれた三人には改めてお礼を申し上げます。



平成二十三年三月卒業生進路

赤尾 健一 松戸市立病院
明石真未子 名古屋大学附属病院
秋山 佳亮 千葉大学附属病院
秋山 文秀 千葉大学附属病院
荒川 裕貴 関東労災病院
井川 祐一 金沢大学附属病院

そして、先生たちとの歓談後、司会の二人が無事に会を締められました。最初から最後まで、とても良い司会だったと思います。

この企画を進めていく途中で様々な困難もありました。一番大きかったのは、前述した地震のことです。被災者のことを考えると、謝恩会を開催すべきかどうかでも話し合いました。そして、毎年のことかと思いますが、国家試験の迫り込みの時期でなかなか大変でした。自分は本当にヤバイ状況だったので逃げ出したくなることも多かったのですが、他のメンバーたちに支えられて、なんとか持ちこたえることができました。

僕たちの代は個人主義の人が多くて、まとまりがないように見えますが、とても仕事ができ親切な人が多く、おもしろい最高の代だったと僕は思っています。

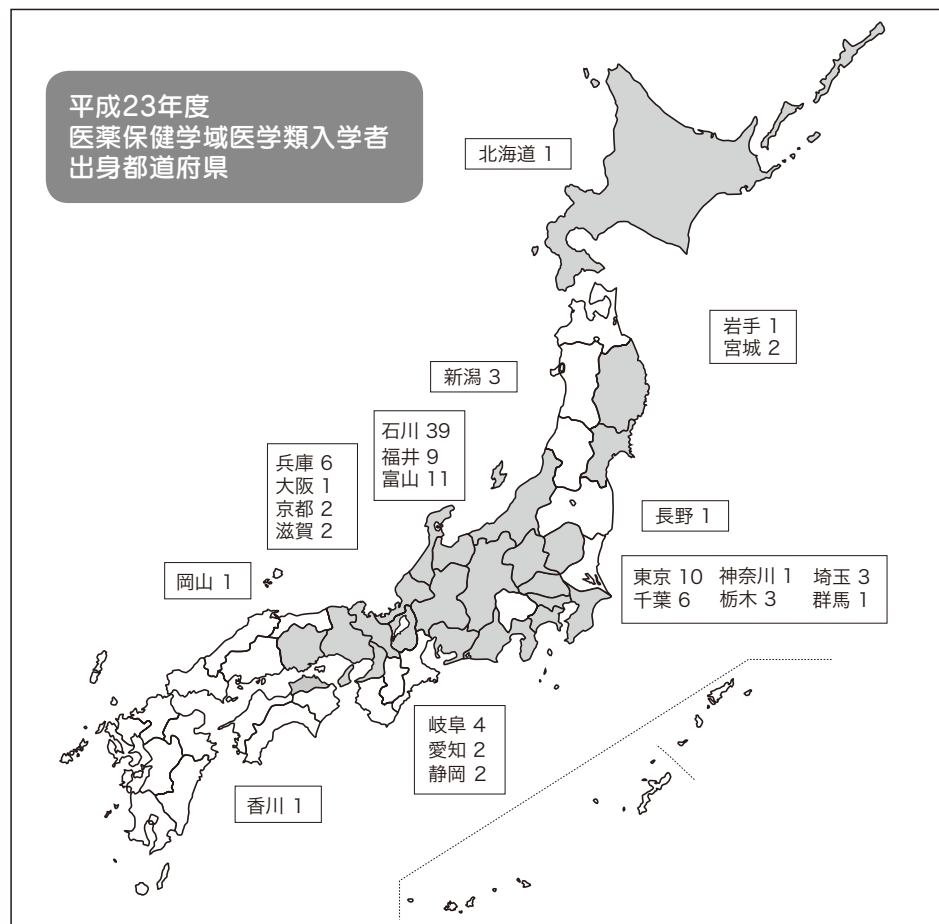
最後になりますが、先生方はもちろん、本当に色々と助けてくれた同期のみんな、そしてこの企画を実現してくれた金沢ニューグランドホテルの吉井さんをはじめとするスタッフの皆さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(謝恩会実行委員 北野 俊介 記)

池田 汐里 長野中央病院
石塚 万貴
石原 弘喜 東京労災病院
位田 優
井村 紗江 公立羽咋病院
上野 琢郎 金沢大学附属病院
宇津木翔平
梅田 良祐 神鋼病院
遠藤 翔

大田 聡一	東京都立墨東病院
大津 信一	東京医科歯科大学附属病院
大貫 佳春	
岡田 大吾	済生会川口総合病院
岡田 まりえ	金沢大学附属病院
角田 洋平	沖縄県立北部病院
笠原 美優	
門本 卓	金沢大学附属病院
加納 亮	金沢大学附属病院
蒲田 亮介	金沢大学附属病院
川合雄二郎	佐久総合病院
岸田 貴喜	小牧市民病院
北野 俊介	九段坂病院
木村 慶	宇治徳州会病院
櫛 裕史	横浜栄共済病院
熊谷 祐作	石巻赤十字病院
栗田 康寿	金沢大学附属病院
黒田 かおり	福井県済生会病院
幸田 敬悟	磐田市立総合病院
小西 正剛	公立松任石川中央病院
小林 峻	
佐伯 啓吾	市立敦賀病院
酒井 秀行	仙台赤十字病院
阪下 達哉	岐阜県総合医療センター
佐藤 仁信	福井県立病院
佐藤 祐充	東京大学附属病院
佐藤 佑	横浜市立大学附属市民総合医療センター
佐藤 礼子	金沢大学附属病院
澤田 知佐	金沢大学附属病院
清水 貴樹	金沢大学附属病院
清水 吉晃	
末松 哲郎	
杉田 浩章	金沢大学附属病院
杉本 寛之	大阪大学病院
杉山 賢郎	千葉労災病院
鈴木 美佳	金沢大学附属病院
清島 淳	富山県立中央病院

高石 政男	太田西ノ内病院
高橋 雄治	
武島 知志	金沢大学附属病院
竹本 大輔	金沢大学附属病院
館 英里佳	茨城県立中央病院
田中 広明	金沢大学附属病院
田中 雄亮	
谷口 裕太	福井県立病院
丹羽 智	金沢大学附属病院
筒井 泰史	市立砺波総合病院
坪本 真	石川県立中央病院
寺田 華奈子	
寺田 七朗	日本赤十字社医療センター
寺田 百合子	
所 智和	
土手 尚	聖霊浜松病院
友杉 俊英	名古屋第二赤十字病院
内藤 祐志	豊橋市民病院
仲 拓磨	横濱市立みなと赤十字病院
中井 雄大	金沢大学附属病院
中務 智文	筑波大学附属病院
中村 翔大	黒部市民病院
南部 優介	金沢大学附属病院
西田 雄亮	筑波大学附属病院
西村 竜哉	国保旭中央病院
沼 真吾	岡山赤十字病院
長谷川 博紀	金沢大学附属病院
林 憲吾	
深川 浩史	金沢大学附属病院
福田 真紀子	東邦大学医療センター佐倉病院
藤田 欣也	福井県立病院
藤本 宏子	
古川 敦行	金沢大学附属病院
古谷 直生	
牧石 祥平	金沢大学附属病院
松山 聡子	市立川西病院
三浦 健	



水牧 裕希	虎ノ門病院
溝口 麻子	
南 宏典	横浜市立市民病院
森 雅之	金沢大学附属病院
森 美彩子	富山県立中央病院
八木 俊洋	金沢大学附属病院
安田 枝里子	大津赤十字病院
山口 淑郎	一宮市立病院
山口 浩輝	

山崎 真平	京都大学附属病院
與語 葵	青梅市立総合病院
横本 竜徳	京都大学附属病院
吉谷 純哉	厚生連高岡病院
四日 章	
和田 裕紀子	中部労災病院

(進路については本人の同意のもとに記載しています。編集委員会)
(五十音順)

医学部百五十年史のための覚え書【31】

明治前期における石川県管轄の医育機関とその奉職医師について

赤祖父 一知

明治九年（一八七六）に越中国と敦賀を除く越前国嶺北七郡が加賀能登両国に併合され、今日のほぼ北陸三県に相当する大石川県が成立した。当時、人口一七八、五万人を有する日本一の大県となった。

このとき、金沢病院・同医学所（註一）を中心として、まず富山分病院（のち富山病院）を新設、翌明治十年（一八七七）には、福井、富山の両病院にも、石川県管轄の医学所（図一、二）が附設された。大田美農里（金沢）、田中信吾（富山）、馬嶋健吉（福井）らが夫々の病院院長兼医学所長となり、医師の教育と医療にあたった。各病院、医学所に勤務したのは、表一に示す奉職履歴によって内務省医師免状を

下附された当時の指導的な医師であった。

明治十年八月内務省達乙第七十六号「医術奉職者無試験内務省免状下附の制」が布達された。これには「維新以来該術ヲ以テ諸官廳及地方公立病院ニ奉職從事シ主トシテ醫療若クハ教授ノ任ニ當タリタル者ハ志願ニヨリ試験ヲ不須ニ免状可交附候」とあり、その條件の第八項「府県立病院当直医以上」に該当し国家資格の免状が交付された。

奉職履歴による内務省免状は、まず公立病院・同医学所関係者、次いで伍堂卓爾（第一九四三号）らの陸海軍関係者に授与された。明治十二年（一八七九）十二月福井、富山両医学所が金沢医学学校に併合されたが、各地の要望によって同十三年（一八八〇）

に再興され、このとき七尾病院にも医学所が置かれることになった（図三、四）。富山には高峰精一、七尾には横井三柳が派遣された。しかしその後、明治十四年（一八八一）福井県が分県独立し、同年末には石川県の富山、七尾の両医学所が廃止され、金沢医学学校に併合された。

なお、七尾病院医学所関係者として、その設立に尽力した地元の安田元吉には、明治十六年（一八八三）十二月の内務省達「十年以後奉職セシ者ト雖モ該達に比準スヘキ者ハ特別ヲ以テ志願ニ依リ直ニ醫術開業免状可致授与」の特例によって、同十七年（一八八四）に内務省免状（第四七五二号）が下附された。



図1：石川県福井医学所 福井佐桂枝上町
『明治の日本—宮内庁書陵部所蔵写真—』吉川弘文館 2000より引用



図2：石川県富山医学所 富山惣曲輪（現大手町）
『目でみる富山市の100年』1993より引用



図3：石川県七尾医学所 七尾神明町（現通称銀座商店街）
『七尾市医師会百年史』2010より引用

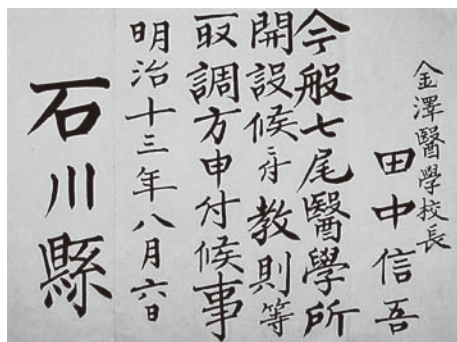


図4：七尾医学所教則調査命令書（医学部資料室蔵）

註1：「石川県金沢医学所」写真
本会誌第131号に掲載済み（医学部資料室蔵）

※金沢・福井・富山各病院の分病院と医師の動静については次号に掲載の予定。

表1：石川県・奉職履歴内務省免許医師の動静

氏名	免許番号	奉職公立病院・医学所
藤本 純吉	592	金沢・[福井]・金沢・富山・金沢
高桑 實	593	[福井]・坂井港
大武 又玄	594	[福井]
竹内 耕石	595	[福井]
馬嶋 健吉	596	金沢・[福井]
宮永 典常	597	[福井]
土田 錫	598	[福井]・坂井港
横井 三柳	599	[金沢]・七尾・杉木新
明石 朝幹	600	[金沢]
大田美農里	601	[金沢]
藤井 方亭	602	[富山]・魚津
石川 鼎	603	[富山]
楠 香居	604	[富山]
赤祖父義正	605	[富山]
藤井 貞為	606	金沢・[富山]・高岡
織田 秀教	607	[富山]
須賀 忠愛	608	[富山]
根尾 巽	609	[富山]
Ⓐ	610	(津田 淳三 [金沢]と推定される)
高峯 精一	611	[金沢]・富山
田中 信吾	612	金沢・[富山]・金沢
松田 壬作	613	[金沢]・杉木新・七尾
原田 俊三	614	[金沢]
稲坂 謙吉	615	[金沢]・大聖寺
石川 孝恭	616	[金沢]
宮北 徳	617	[金沢]
上杉 寛二	618	[金沢]・福井・武生
辻岡 直江	619	[金沢]

〔 〕内は免許申請時の勤務病院・医学所
(免状下附年月日：明治11年2月5日)
(赤祖父一知 『医譚』 No64, 1993より)

十全昔話

思ひ出すまゝに

京都支部 専門・内科

渡辺 正男(昭和十七年専門部卒)

私は只今九十才です。元氣とは言え物忘れはひどい・記憶力は衰えてとてもまとまと文章は書けないと思いますが高齢に免じてお許し下さい。私達の学生時代といえは昭和十六年からは太平洋戦争が始まって日本は軍部の独裁政治下にあつたとと言っても過言ではないような時代でしたから楽しい思い出はありません。数少ない思い出や体験の中から未だに頭の中に残っていることを学生時代・戦争体験・開業時代の順にご紹介致します。

① 私達は半年繰上げて昭和十七年九月卒業でしたからその数ヶ月前の或る日谷野内科でのポリクリの最中に起ったことです。が何故か私の頭に残っているのです。多分それは私が若かったせいです。その時の症例患者は妙齢の女性でした。病名等憶えていないが谷野教授のご説明を緊張して聴いている最中にどうしたことでしよう。もののはずみとでもいうのでしょうか、寝台上的の患者さんの下腹部にかけてあつた布がずり落ちて了つたのです。突然のことに私達はあつと驚いたのですが謹厳な谷野先生もいささか慌てられて思わず叫ばれたのです『早く覆いをかけなさい、見えるぢやないか』世の中では時として考えられないような出来事が起ります。

② 人間には五感の他に第六感とか、お告げがあつたとか或いは自分自身に何かおきるといふ予感がする又は虫が知らせるとかそう言つた事は確かにあります。私は昭和十七年十月軍医候補生として

入隊、十二月には軍医少尉に任官して十八年一月には満州熱河省の独立守備歩兵第十三大隊付軍医として赴任いたしました。当時私は満州には戦斗地域は無いと思つていたんだがなんと熱河省では毛沢東の率いる共産八路軍が既に蜂起していて装備はまだ貧弱だがよく訓練されていて勇猛かつ神出鬼没で我が獨立守備隊とは層々戦斗を繰返していたのです。このような状況の中で私も巻き込まれた銃撃戦が生じたのです。

獨立守備隊の大隊は普通の連隊を少し小型にした程度で大隊長は中佐でした。四つの中隊がありこれも一般の中隊より兵数が多く中隊長は大尉でした。広い範囲を守備する爲各中隊は可なりの距離をあけて分散駐屯していました。昭和十八年の秋頃だつたと思いますが私がたまたま出張勤務していた中隊に赤痢患者が発生し先づ私が部隊本部医務室まで輸送することになりました。この辺りは田や畑ばかりで道路は狭くてトラック等は全く通行不能です。患者は担架で運ぶより仕方がないのです。部隊本部は可なり遠方です。私と衛生兵二名に一ヶ小隊が護衛についてくれることになりました。小隊長は川井少尉です。苦力を雇つて担架をかついで貰い出発しました。私と川井少尉はずっと二人並んで話し乍ら歩いたんですがそのうちに彼は声を強めて言つたのです。俺は今日の護衛にはどうしても行きたくなかつたんだよ、何とか他の小隊に代えてほしいかつたんだけどなあ、中隊長の命令を断わることは出来なからなとなんべんも繰返し私に訴えていたのです。私にはなんと言つて慰めてよいか分らずウンウンと頷くだけでした。いつの間にか日が暮れて周囲

がうす暗くなり私達は高粱畑の中の一歩道を歩いていました。気がついたら月が出ていて暗さの中にもなんとなくうす明りを感じていました。突然三十メートル程先を歩いていった尖兵(センペイ)に対して『誰乎』と叫ぶ声が聞こえそれに対して日本軍だと尖兵が答えた途端バリバリと銃声がして銃口から火を吹くのが見えました。川井少尉は指揮をとる爲前へ駆け出したようです。私は思わずその場に伏せていました。バリバリという毎に道路にはパッパッと土煙があがり、あの細い高粱の茎にも弾丸が命中してパッパッパッと倒れるのがうす暗い月あかりの中に見えるのです。生れてはじめて弾丸の下をくぐつたのです。心の中では落ちつけ落ちつけと言っているのですが何とも得体の知れぬ恐怖心がわきあがつてくるのです。所が戦い馴れたるわが川井小隊は直ちに戦斗態勢に入り応戦していたのです。小銃しか持つていない敵に対して擲弾筒を打ち込んで攻撃し敵は逃走したのです。どこかで軍医殿軍医殿と呼ぶ声がしました。何事ならんと声の方へ行くとなんという事でしょう川井少尉が倒れていたのです。うす暗い月ばかりでしたが右背部肩胛骨の下に射出口がポツカリと巨大な口を開いて大量の血液が空気と混じて泡状となって噴出しているのです。射入口は小さいのでうす暗い所では見つかりませんでした。川井少尉の顔面は血の気が無く蒼白で脈搏は殆んど触れない位弱く聞きとりにくい細い声で苦しい苦しいと訴える苦悶の表情を見てはやく何とかしなければと焦るばかりで頭は完全にパニック状態でした。とにかく軍医携帶囊の中から消毒ガーゼやヨードチンキ等出してみても創口が大きすぎ

て何の役にもたつたのです。只おろおろし乍ら見守るだけでした。そして二十分位で亡くなつて了つたんです。残念でしたし悔しかつたです。私にはずいぶん激しい銃撃戦だつたと思えたのに負傷者は川井少尉一人だけでしかも戦死されたのです。戦争は非情なものです。川井少尉はあまりにも不運でした。彼は中隊長から護衛小隊長を命ぜられた時点でこの事を予感されていたことは前述の彼と私の会話で明らかでありましよう。私には一生忘れられない戦地での思い出であります。

③ 私が八十才で医院を閉鎖廃業したのが平成十二年ですから多分平成七年頃のことです。その頃脳梗塞で入院していた老人が退院自宅療養中であるが高齢の爲もあつて衰弱して来たというので依頼されて私が往診していたのですがその老夫人の話です。家族はあつても夫々に仕事がありご老人の看護は殆んど老夫人がされていました。その一生懸命振りを見て私はおばあちゃんの方がまいってしまふんじゃないかと心配でした。そんな看病の甲斐もなくやがて老人は亡くなりましたがその時老夫人は服装を改めて私の前に正座して両手をつき「長らくお世話になり有難うございました。これで私の役目は無事に終りました。厚くお礼を申し上げます」と挨拶されて私はびつくりしてしまいました。こんな経験はいまだかつて無かつたからです。そして一週間・初七日の法要を済ました後突然倒れ救急車で運ばれたが既に死亡されていたと家族の方から知らされました。とても現代離れして私には古武士の老夫人もかくやと思われ私達と同じ市井の中にもスゴいおばあちゃんがいらっしゃるもんだと感心いたしました。

学生コーナー

僕の気持ちは晴れたり降ったり曇ったり

大矢 和 正

爽やかな風の中に夏の匂いをふくんできている今日この頃、如何お過ごしでしょうか。

はじめまして、まずは自己紹介をさせていただきます。名前 大矢和正、年齢二十五歳、男。二〇〇九年に学士編入により三年生から金沢大学の学生になりました。地方大学の基礎医学を学ぶ学科を卒業しました。修士課程には進んではいません。研究という世界を少し垣間見ただけで医学科にきました。金沢大学では水泳部とピアノ部、あとクラシック研究会に一応名前を登録しています。

ある日、友人に尋ねられました。「目標と目的の違いってわかる？」僕の頭の中には、道路わきにある標識と、「ま」と書いてある立て板が浮かんでいました。そしてその立て板に向かって野球ボールを投げているのをイメージしたけれど、そのボールが的に当たることはありません。僕は昔、高校球児でしたが、コントロールに問題があつて監督によく叱られていました。これが本格的な外れとかいうのだろうかと思ひながら、「よくわからんわ」と答えるしかありませんでした。そういえば問われるまで、目的と目標の違いなんて考えたこともありませんでした。漠然と使うことは今までもありました。意識はしていませんでした。その後、辞書を引いてその意味を考えましたが自分なりの解釈で言えば、目的が山の頂上で目標はその道筋といったところでしょうか。

僕がここにいる目的は、困っている患者

さんとその家族を何とかしたいというものです。治せない病気を治せるようにしたいのです。これを実行するにはどうしたらいいかを考えて、その結果医師免許を取得する道を選びました。ただ、目的を達成するのにひとつと良い方法があれば医師免許取得に拘らなくても良いと思っています。しかし、将来的に根治療法を開発するとは言っても、その開発するまでの期間、患者さんは病気が治りません。家族の方も困っています。なので、現実に沿った解決法を探したところ、それは疾患との共存を受容し現状に満足できる精神の獲得により代替できるのではないかと考えました。

この目的、目標に自分の好奇心を加えた視点から見た四年生の授業がどうであったかを正直に述べたいと思います。それは、つまらなかつたという言葉になります。誤解の無い様に記しておきますが、金沢大学の講義の質が低い、他大学に劣ると言っている訳ではありません。他の学生は、疫学、分子機序、治療法の全てをしつかりと身に付けているのですから。純粹に、僕が知りたかつた事を講義からは得ることができなかつただけなのです。僕が講義で知りたかつたこと、それは教科書に書いてない内容です。これには大きく二つあるのですが、一つが科学としての疾病と症状としての疾病の乖離の融合です。一つ例を挙げます。疾病原因や症状は書いてありますが、どうしてその原因によりその症状が出てくるのか教科書には書いてありません。そこがどこまでわかっているのか、どうい

メカニズムがあるのかを授業では聞きたかつたのです。もう一つが医師としての人間への対処法です。医学生になつてから知人からの病気の相談が増えました。そして、こんなことがあります。認知症の祖父がいるのだが、医者嫌いで病院を嫌がる。しぶしぶ連れて行つてお薬をもらつても頑なに飲まない。飲めば症状が良くなつて周りが助かるのだが病気の進行とともにさらに頑固になつてしまつてお薬を飲んでくれない。どうしたらいいか？これは適切な診断だけをすれば医師の仕事は終わるという甘い考えでは対処できません。これはどうしたらいいのでしょうか。隠してこっそりごはんに入れるという話を聞いたことがあります。見つかつて信頼関係が破壊されたとも聞いたことがあります。もし、先生方がこういう事態に直面したらどのように対処されるのでしょうか。小児がんで片足を失つた子供が親に向かって、「おまえの気持ちはわかるつて言つたつて、あんななんかにわかるわけないだろ！」と叫ぶ人にどういふ言葉をかけたらいいのか。人間への対処法というのは説明が難しいですが、こういうことです。治療のさらに向こう側ではどのような対処をするのかを聞きたかつたのです。ただ、四年生に求められている事は違つたのでしょうか。そのような事もあり、僕は授業を聞くよりかは、少しでも本を読もうと決めました。人に対処する為に、いろいろ知らないといけないと思つたからです。その甲斐あつて、試験はすべて六〇%ぎりぎり、CBTにいたつては成績三です。偉そうなことを言うのは、それなりの成績を取つてからでないと格好がつきません。恥を忍んでこの原稿を書きました。

話は変わりますが実はこの原稿はpart1です。part1があつたのですが、内容に問題があつたため書き直しました。それを読みたいという奇情な方がいらつしやれば声をかけて下さい。片町の飲み屋さんで、ジュースとつまみ代との引き換えにお渡し致します。僕はお酒があまり飲めないのです。冗談はさておき、内容に問題があるpart2を書いた事で得るものもありました。part2を推敲するにあたつて様々な意見を言ってくれる人が僕の周りにはいました。面白くていいんじゃない、とか、色々な人への影響を考えれば止めといった方が良い、とか、医学部だから世間を学ぶという意味で大人しくしておいた方が良く等々。良い悪いも含めて親身に意見を言ってくれる人がいるというのは幸せなのだと思います。

そんな幸せ者の僕は、やはりお世話になつていらっしゃる方への感謝で締めくくりたいと思います。

臨床に出れば患者を一人でも多く救える時間を割いて授業をしてくれる先生、世界を相手に切磋琢磨する研究の時間を割いて授業をしてくれる先生、自己の体験を病歴、疾患という形で提供して頂ける患者さんには本当に感謝しています。授業の準備を含めれば先生、患者双方に膨大な負担をかける事になるでしょうし、態度の悪い僕のような学生には頭にくる事だろうとも思います。少しでも、自分を高める事でその恩を返せればと自分に言い聞かせて日々過ごしていますが、それが表に現れるまでは申し訳ありませんがまだまだ時間がかかりそうです。日々、精進し己を磨いて高みを目指す事で感謝の意とさせて頂きます。本当に有難うございます。

二〇二二年三月三十日 水曜日

【学友支援室からのお知らせ】 「金沢大学学友会」の設立等について

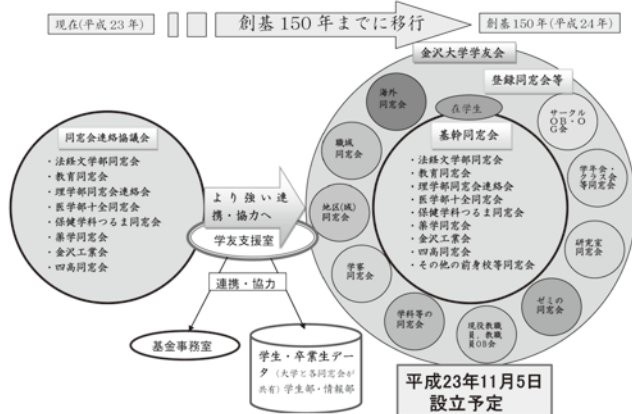
金沢大学は、一八六二年設立の加賀藩彦三種痘所を源流とする日本で三番目に歴史と伝統ある国立大学で、二〇一二年に「創基百五十年」を迎えます。また、来年は学域・学類の卒業生を初めて送り出す年となることから、これを機に全学同窓会「金沢大学学友会」(学友会)を設立することになりました。

学友会は、「金沢大学学友会設立構想概念図」に示すように、十全同窓会も参加した「金沢大学同窓会連絡協議会」を構成する学部・学科及び前身校の同窓会(基幹同窓会)を中核にして、サークル・同好会等の同窓会、学年会等の同窓会、地域・職域・海外の同窓会のような金沢大学の卒業生で組織する様々な同窓会のうち、学友会に加盟登録する同窓会(登録同窓会)で構成する、より広範でゆるやかな連合組織となる予定です、第五回ホームカミングデイ開催日の今年十一月五日に設立されます。各

＜金沢大学の重要行事日程＞

- 未来開拓研究公開シンポジウムin大阪(仮称)
十月一日(土) 十四時～十七時三十分
大阪ビジネスパーク円形ホール
- 第四回未来開拓研究公開シンポジウム
十月二十九日(土) 十三時～十六時三十分
東京一橋記念講堂
- 第五回ホームカミングデイ、金沢大学学友会設立総会
十一月五日(土) 十三時～十八時
金沢大学角間キャンパス

「金沢大学学友会」設立構想概念図



地・職域等で「加賀の会」、「兼六会」、「金大会」、「北の都会」等の名称で卒業学部を超えて集まりをもつていただいている団体や、研究室等の同窓会の登録をお願いいたします。

学友支援室では、電子メールで同窓会の短信や大学の動きを伝える「学友支援ニュース・レター」(テキスト&PDF版)を団体及び個人に配信していますので、御希望の方は以下のURL経由にてどうぞお申し込み下さい。gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp
なお今年は、東京(十月二十九日)と

大阪(十月一日)で、金沢大学のシンポジウムが開催されます。両地域の皆様は是非御参加ください。初の開催となる大阪では、シンポジウム終了後の午後六時から、関西地区同窓会合同の大懇親会

編集後記

「魯迅とともに来日した清国からの金澤医学専門学校留学生」と竹田亮祐前十全同窓会長によつて紹介された(十全同窓会報一三七号、日本医事新報四三三七号) 厲家福先生を含む明治四十一・四十二・四十三年卒業生が大正十五(一九二六)年五月、金澤医科大学開学式につきの祝詞を寄せている。

翹企 鴻規 夙著 令聞
皇 皇 大學 北陸 重鎮
教育 宏施 聲名 聿震
憶昔 擔簦 渥沾 化雨
今隔 重洋 時懷 東土
照眼 紅榴 令值 夏五
遙聽 風聲 遙瞻 盛舉
頌祝 千秋 長垂 榮譽
前中華民國教育部總長 湯 爾和
中華民國陸軍一等軍醫正 厲 家福
浙江省陸軍軍醫院院長 厲 家福
前江蘇省立醫學專門學校校長 周 威
浙江省立醫學專門學校教授 錢 崇澗
(十全會雜誌三十一卷九号)

厲家福先生らは中国における近代医学教育普及の祖となった人々であるが、日本の母校に深い敬愛の念を抱きつづけて

も予定されますので、御参集ください。詳細は大学のホームページや学友支援ニュース・レター等で順次紹介していきます。

(学友支援室長 西谷 公作 記)

いたことがこの四言古詩からも伺える。敢えて読み下せばつぎのようになるだろう。か。「翹企たる鴻規 夙著たる令聞 煌煌たる大学は 北陸の重鎮たり。教育は宏施され 声名は聿震す 昔担簦せるを憶い 潤いを厚くして雨と化す。今は重洋を隔つも 時にして東土を懐かしむ 照眼の紅榴を 夏五に値せしむ。遠く風声を聴き 遙か盛舉を見ん 千秋を頌祝し 榮譽を長垂す。」鴻規は母校の栄えある礎といった意味になろうか、それを四人は翹企すなわち待ちわびていた。そして、その達成を心から祝しているのである。

今般の東日本大震災で、相当数に上る留学生が一時帰国中という。西日本にありながら本学も例外ではないようである。彼らはどのような想いをもって日本を離れ、どのような眼で日本と日本の科学技術を見ているのであろうか。多くの留学生が早期復学し、再び日本で学問を修め、やがて日本と日本の大学へのリスペクトをもって国際社会と後世に貢献する、そのような明日がより切実に望まれることである。

(祝詞読み下しにあたり理工研究域加納重義教授のご指導を得ました。)

(編集委員 山本 博)